

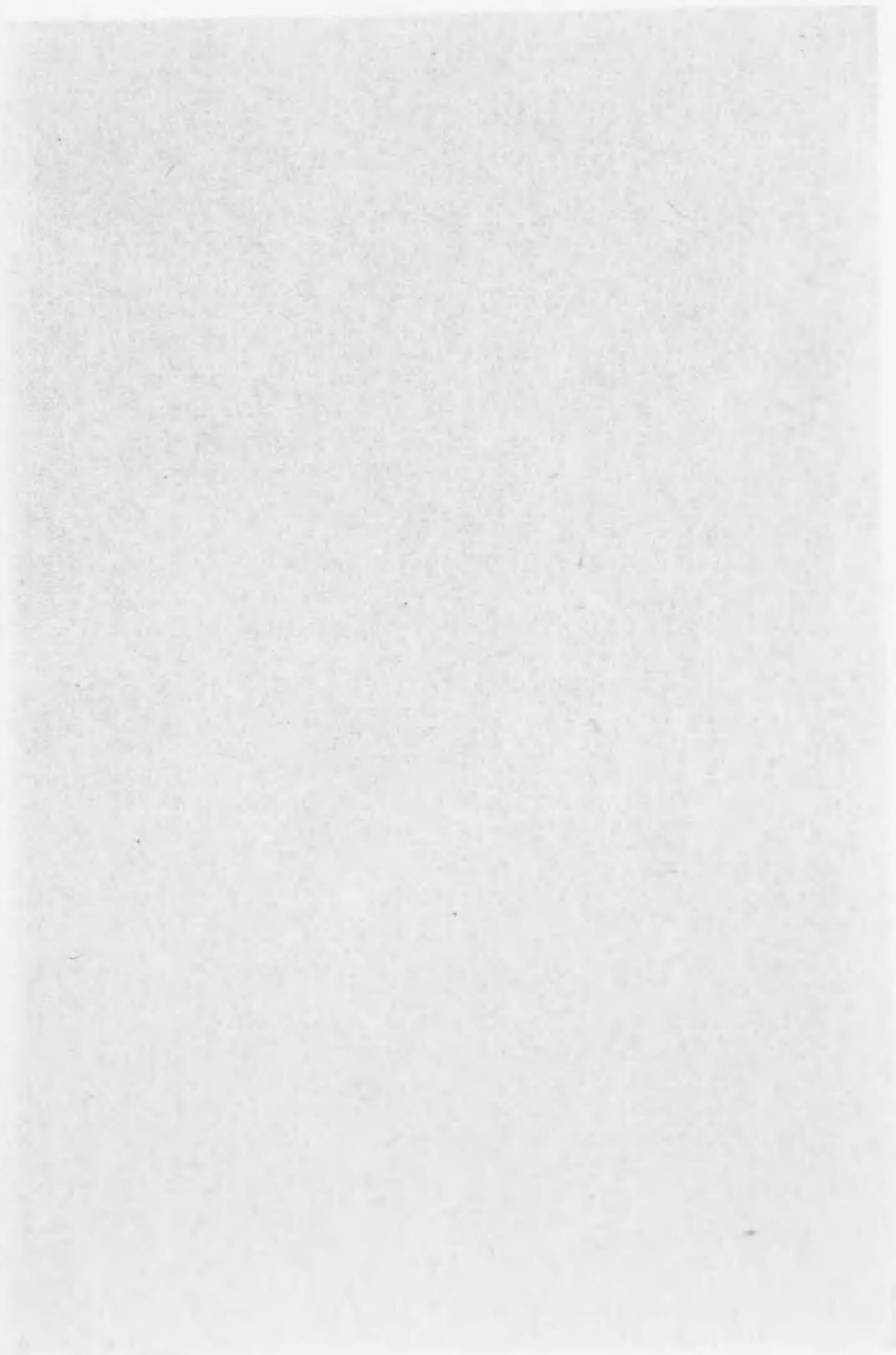
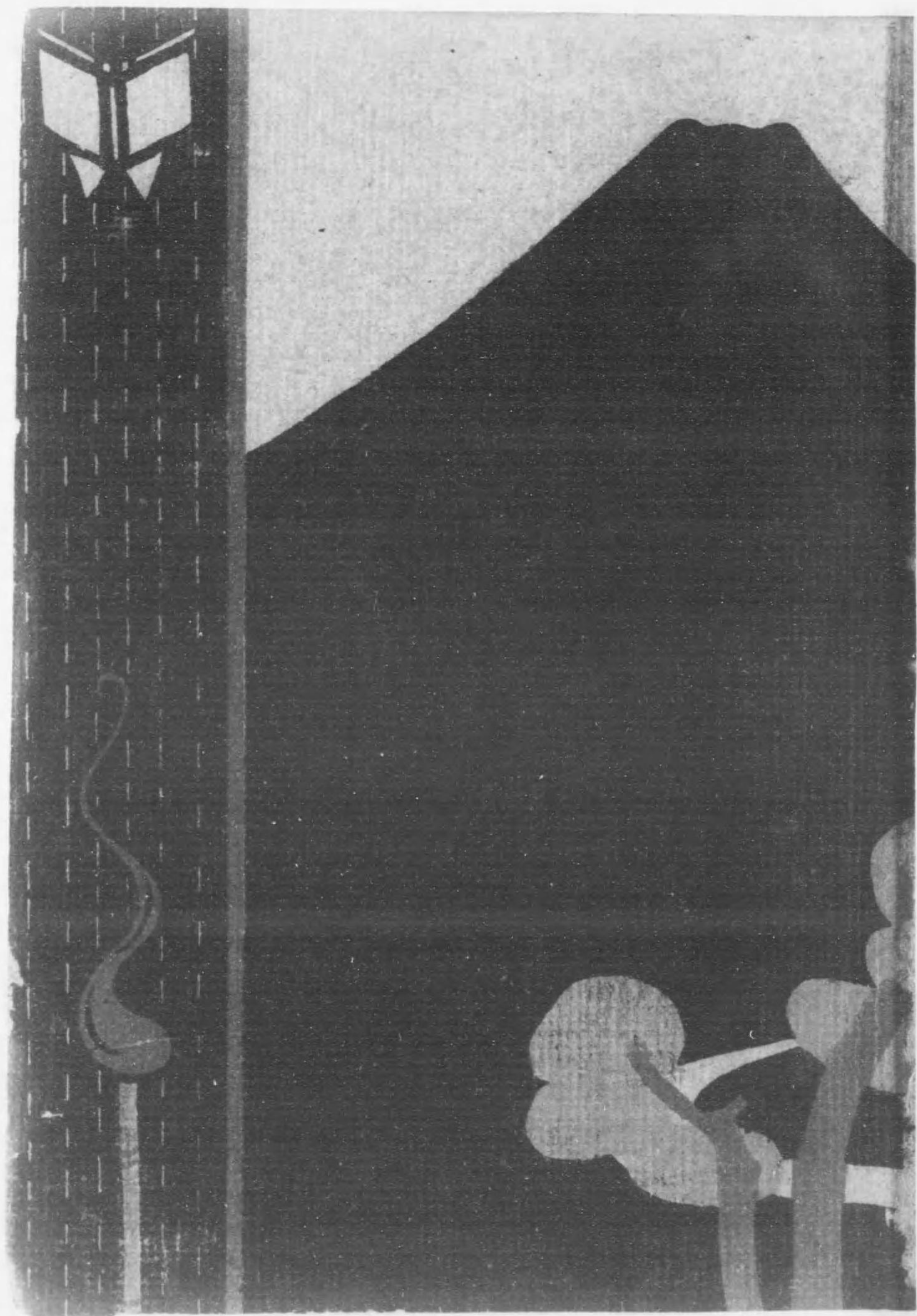
71  
579

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>16m</sup> 1 2 3 4 5

始



2.7.30



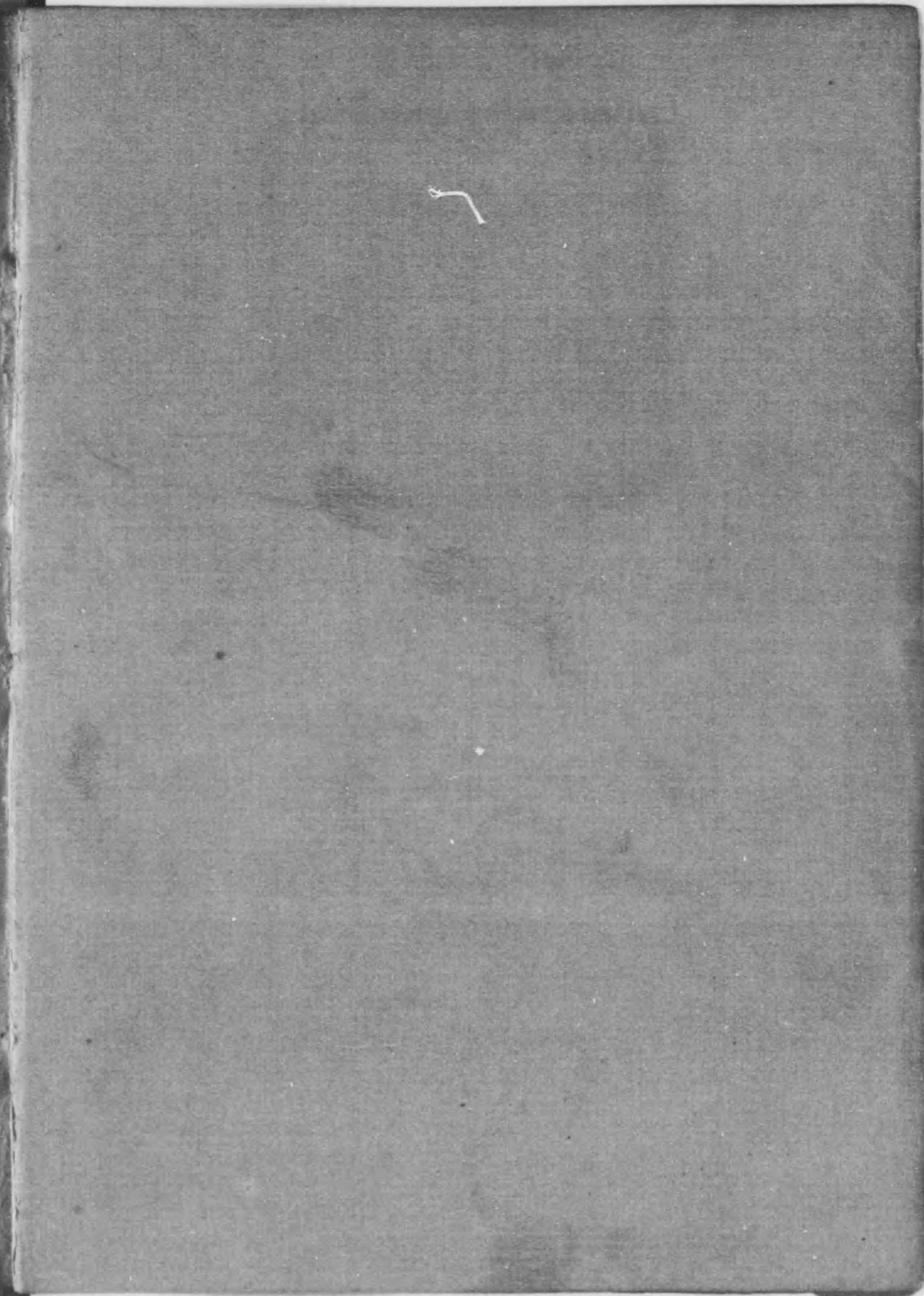
71

71-579



我兄弟

二弟仲光封卷



71-579

自序

著者にも、ひとりの兄があつた。  
その兄は去る四月八日の未明に故郷の家で病歿した。  
たまたま本篇の稿を急ぎつゝあつた著者は、兄の枕邊に  
新装せるこの一巻を置き得なかつた事を遺憾に思ふ。  
燕來る暖簾のかけに、永劫に兄の姿を見る事は出来ない。  
絶えて兄の聲を聞く時もない。  
曾我兄弟は時を同じうして裾野の露と消えた。

兄にはぐれて淋しう病む著者には、梅の實落つるこの頃の柱のかけに、夏瘦せて思ひ出づる事が多い。遙かにこの一篇を亡兄の靈前に捧げて、せめてもの心やりとしたい。

六正五の夏

著者

目次

■箱根の巻	一
■元服の巻	三七
■大磯の巻	四七
■名残の巻	一〇一
■首途の巻	一三六
■狩場の巻	一五七
■思ひ寝の巻	一八九
■藻屑の巻	二二一
■討入の巻	二五三
■白洲の巻	二七三
■追善の巻	二九九
■虎が雨の巻	三二七

# 曾我兄弟

平井晚村著

## ■箱根の巻

伊豆の名族河津三郎が赤澤山で工藤祐經の手に討たれてから、一萬(十郎祐成)箱王(五郎時致)の母御前は幼なき兄弟及び喪中に出産せる嬰兒を連れて、泣く泣くに河津の館から曾我の里に嫁いだ。

父なき子、父を見知らぬみどり兒。物の哀れを身ひとつに集めた有髪の尼は

箱根の巻

涙ながらの曾我山に結ばれ易き夢のいく歳を過したのであつた。それもこれも、拙なう残りし子等が不惑さ、今は早や一萬は十歳、箱王も八歳の恙なき日を迎へた。

母御前は、世に云ふ三人の連子までして縁づきした曾我殿への氣兼やら、子等が明暮の寂しげな眉根の雲を見るにつけても、暗い胸の窓に、夜も晝も情の梭が閃めき沈んだ。

今日も母御前は柱の蔭に停んで、日脚を憎む鳥の音を聞きながらほつと遺瀨なく溜息を吐いた。

まことや、父の在せし昔は、河津あたりの春に秋に、思ひの儘の小袖着て育くまれし兄弟も、人の情に縋る今は揺らめく草の露にさへ涙ぐまる、夕陽の遠に、幼な遊びの追憶が胸に泛ぶ。曾我の館へ参つてから母の淋しさ。返り花の

葩は何時も冷たい夢に怕たれ勝である。

「一萬も、箱王も、この頃は何とやら佗しげに見ゆる。亡せ給ひし曾我殿の最後なぞ聞いての事か」

母御前の眼に著きほど兄弟は父を戀しがつた。曾我殿とて辛うはせぬ。勿體ない程心にかけて呉れるけれど、生さぬ仲の遠慮がちに畏る一萬は、僅かに世をば知り初めに兄者振りに箱王を誘ふて、今日も人なき野路に立出で、はさまく悲しい事を云ひかけた。

「箱王どの、父上を見参らせたうは思はぬか」

「逢ひたう御座りまする」

「兄も逢ひたい。が、何時までも逢ふ事は出来ぬ」

「何時までも逢はれませぬか、百千日の後までも逢はれませぬか」



『われ等が死んで、草葉の蔭とやらへ行かねば逢はれぬ』

『その草葉の蔭とやら、何處に御座りまする』

父の墓、盡きぬ怨を封じたる父祐泰の菩提寺（伊豆國田方郡伊東町稻荷山東林寺）へ詣らうにも、童の旅は容易でない。——箱王は子供心に頑是なく、只一筋に思ひ詰めて兄に強請む。

『稻荷山とやら、東林寺とやらへ詣りたう御座ります。連れて行て下され』

『お、連れて行きたいなれど、御墓に供へる土産が無うては』

『桔梗なら野にも山にも咲いて居ります。刈萱も、みそ萩も……』

『そのやうな花手向けたとて父上は欣ばせられぬ。われ等が土産は外にある』

『はて、何で御座りまする』

箱王は思案に剩つたと云ふやうに小首を傾けて、解き得ぬ謎に惑ふた。

『父上を卑怯な遠箭にかけさせた仇、忘れはすまい』

『工藤どの……祐經どの……』

『その祐經どの、首級の手向けを、父上は待たせらる、』

兄弟は手を取り合ふて、今更の如く傳へ聞く父の最期を思ふては泣いた。野に暖かき陽は消えて、夕ざれの風が吹き出すと、ちろ／＼と啼く蟲の聲が露めく袖の端にもつれた。

二

一萬と箱王は手を曳き合ふて家路についた。伊東の菩提寺へは夜の路かけて行きもならず、殊には母の待侘びて在さん事を憚かつて、冷たき草履を踏んだのである。

宵を空しく行燈して、わが子の戻りを待つて居た母御前は味氣な涙を密と袖口に拭いた。

「母に嘆きをかけてはなりません。夕風は身の毒、暮れぬ間に戻らねばなりませんぞ。……其許達身に恙あつたら、母は何として彼の君に申譯しようやら……」

彼の君とは誰。今は曾我の内室と呼ぶる、身で、亡き河津殿の名を明せぬ胸の切なさ。夫と察して一萬も箱王も両手をついて詫を云ふた。

「一萬が悪う御座りました。これからは早う戻りまする」

「箱王も悪う御座りました」

慎しまやかに額伏する前髪のみどりも幼なく、父ご亡ければ肌寒う寝る二孤の姿は、又しても母御前の涙を絞る種であつた。

「それでこそ賢い和子ぢや。いまの間に浴みして、暖かい飯喫べたが宜い」

兄弟は母の前を退つて廊下に出た。

さやくと夕照る月に葉袖も濡れて、前裁の樹々のそこ此處、煙るやうな秋の宵の空低く悲しい禽の聲が聞える。

「お、雁が啼く」

二つ違ひの兄ながら、一萬はふと立どまつて柱の蔭から空を仰いだ。

「一い、二う、三い、四う、五つ……五羽飛び居る」

箱王は頑是もない。

「箱王どの……彼の雁が羨ましようはないか」

「兄上。何しに雁が羨ましい、と」

「五羽の先に飛ぶが父、その次が母、あとの三羽は子供達である……親子揃ふ

て何處へ行くやら』

一萬の聲は潤んで居た。

三

「喃、箱王どの、われ等にも父の在したら、彼の雁のやうに打連れてあらうに」

「あれ、後の雁の子が遅れまする」

「遅れても、急げば別れる事もない。……われ等は如何に嘆いたとて、縋るべきお袖もない」

「兄上。死なねば、父上に逢はれませぬかや」

又しても悲しい事を云ひ出で、抱き合ふて泣く兄弟の繰り言を、襖のうちに

聞いた母御前は、堪え兼ねてわつと泣いた。その聲を聞つけた一萬は

「や、母上が……」

と引返した。箱王も案じ顔に後に匿れる。

「母上、御赦し御座りませ、最早泣きませぬ程に」

いほらしう詫入る子等と襖を隔て、母御前の聲は絲のやうに細かつた。

「詫も要らぬ。……空飛ぶ雁を羨む和子達の不感さ。……何事も宿世ぢやなれば、案じ過して病ふてばし給もるなや」

兄弟は背き合ふて二歩三步踏み出したが、何故か知らず頬に悲しき涙が流れた。泣くなど云ふて泣く母にひかされる哀れな雛、やがて巢立ちの狭い、天地にも、父のない子の腫は慙うも曇り勝であつた。先刻から小蔭にあつた一萬の乳母讚岐局は、つと立寄つて兄弟を慰めた。

「早うお涙拭はせられ、や、殿原は假物に泣かせられぬもの、涙を見するは弱いお子ぢや」

「讃岐、箱王は弱くないぞ」

屹と力む箱王の濃い眉根には、性得の負けじ魂が凜々しく宿つて居た。

「お、お強う御座りまするとも。……お強いお子は溫和しうなさらねばなりませぬ」

と左右に兄弟の手を曳いて居室に連れゆき、浴み夕餉を濟ませて後靜かな臥床に小さい屏風を立てめぐらせた。廳で佗しくこの夜を明けると、兄弟は義理ある父の御前に朝の機嫌を伺つて後、母を師匠に手習の筆を納めて庭先へ降り立つた。

四

竹の弓、芒の箭、兄弟は他人を雑へず裏庭かけて梢の鳥を覗つては、へうと鳴らす。ひらくと陽を縫ふて飛ぶ箭に驚いて、ぱつと鳥の立つのを手を打つて喜んだ。

「あの様に逃げ居る」

「他の鳥を目指すな。祐経だけを射止めよ」

誰教へねど心を協せて、亡父の妄執晴らさうする幼なきもの、心根を、世の人は何と見るらし。兄弟は仇々と罵り騒ぎながら、弓を絞つてぶつりくと障子を射た。

「その様なおいたなりませぬ」

世本

讃岐局が裁ち縫ひの針の手をやめて嗜なめると、箱王は手早く芒の箭を矧いできり、と絃を引絞つた。

「讃岐、其方も祐經の味方ぞな。赦さぬぞ」

「怖やのく」

讃岐は針の具を押のけて母御前の居室に行つた。そして兄弟が憚りもなく祐經の名を呼んで弓曳き習ふ由を告げた。

「鎌倉の聞えも奈何。和子達お身に凶事を招かぬうち、確とお叱りなされませ」母御前も肯いて、兄弟を人なき庭の樹蔭に呼んだ。

「お身達は鎌倉殿(右府頼朝)憎しみのか、れるもの、又工藤殿は右府公寵恩淺からぬ出世人。それ等怖い眼をかばうて明暮を事無う過ぐさる、は偏に曾我殿のお情とは知らぬか。……その御恩も思はず、晴がましう仇なぞと口外して、若

し曾我殿御難義の基ともならば何としやる。いまのお身達は葉裏の蟲、人にかかれて生ひ立たねばならぬに……」

母御前が涙ながらの訓戒は兄弟の骨身に應へた。畏まりぬと承まつたその日から、兄弟の邸のうちで遊ばず、遠い野末に出かけては野の禽の立つを追ひつ、幼なき腕に弓勢を競へ合ふた。

夢の間に四年は過ぎた。

「早う元服して鎌倉とやらへ行て見たいな」

と云ふ一萬は既に十五。弟の箱王も十三の春を迎へた。

或日、曾我祐信は兄弟が母(即ち祐信の後妻)に向つて一萬元服の儀を申し薦めた。

「兄弟の存意、薄々人の口端にもかゝるけぢや。いまの間に我が子として元服

濟ませたく思ふが』

慈悲の言葉に異議あるべき筈がない。かくて一萬は梅の浅きに前髪を剃り落して曾我十郎祐成と名乗つた。

はて、箱王を何としようぞ。

五

輝やかに鞍置かせたる引出の駒。その紫の置元結も水際立つた十郎の殿振りを眺めて、嬉しきにつけ今更に

『河津殿世に在して、このやうな芽出度い春に逢はれたら』

と母御前の胸は曇る。——河津の姓を名乗りもならず、世を憚かつて曾我の若殿と呼ばする本意なさは然る事ながら、これをしも浮世と云ふべき宿世を思

へば、足らはぬ勝の慰さめも欣ばねばならぬ。——この上は、弟箱王の身の處置である。兄と違つて荒氣な童、捨置いて我意募らせたら屹度鎌倉の祐經を怨んで、届かぬ企てに身を滅ぼすは定。それも不惑、一層箱根権現の別當が許へ送つて、亡き河津殿が後世を吊はせようと思ひ定めた。——箱王は曾我の人々にも別れて、箱根の別當が手許へ引取られる事となつた。——蝶を追ひ蜻蛉を釣りつ、遊び暮した野の橋のほとりまで送つて來た兄の十郎祐成は、有繫に別れともなけに寄添ふて眼を潤ませた。

『箱王どの、暫らくは立別る、とも折々の消息怠るまいぞ。殊には申合せし一儀世にある限り貫かいでは』

『仰せにや及ぶべき。兄上にも御消息給もりませ』

分け登るべき山の象を仰ぎつ、箱王が進まぬながら供人に送られて曾我の

里を離れたのは文治二年の事であつた。——昨日迄も枕を並べて語り明せし睦ましい兄弟が、離れぬの夢を書く雁の音信に、母の安否を問ひつ問はれつ、翌三年も茲に盡きて、山の御坊にも春待つ準備が急がれた。

箱王も翌くれば十五。山に過した二歳の花にも月にも、父の仇を忘れる隙なく、谷間へ石を轉がしたり、立樹を繞つて木太刀を振つたり、五尺に餘る屈強な軀を鍊へたので、誰ひとり彼の手立つものなく、鬼よくと怖ぢ憚られて居た。その凄まじい鬼の箱王も、時として、寂しげに眼を瞬いて雲の彼方の曾我山のあたりを望んで深き思ひに沈む暮があつた。

『母御前には恙在さいでか、兄上も此方の山を眺め給ふ事のあらうに』

母子流離の悲哀。——それも、これも工藤祐經のなせる業と思ふと、怨の一

念は蛇の如く胸にわだかまつた。

その折柄よ。文治四年正月十五日、鎌倉右府頼朝公は箱根權現に詣で翌日三島へ降るべき旨の觸れがあつた。

それと聞いた箱王の欣喜は、抑も如何ばかりか。

六

やがて其日となつて、右府頼朝は供揃へ美々しく權現に詣でた。——警戒厳しき御座所の程近く忍びゆく箱王が心や奈如に。——大人びてこそは見ゆれ、稚兒鬚姿の何處やらに幼なき佛の残る箱王。五體も慄ふ怨みを吞んで、短劍を握りしめてぢり／＼と近寄つてゆくさまは、草葉がくれに焔を吐く小蛇のやうであつた。——人傳でに聞いた祐經との距離は僅かに二三間となつた。

『いまぞ』

箱王が迅風の如く襲ひ蒐らうとしたその時。——加藤次景廉はふと顧みて隣れる祐經に囁いた。

「工藤殿、そこな稚兒を見させ。河津三郎その儘の面ざし。兼て當山に伊藤入道の孫ありと聞き申したが」

「ヤ、河津に似たる稚兒とな」

祐經は野茨の刺に貫かれたやうに膽を縮めた。顧りみる僅か隔て、屹とばかりに身構へた稚兒の面貌、似たりや似たり我が手にかけて喪はせた河津三郎その儘の幼な顔である。

「扱こそ、我を父の仇と視ふ所存な。心許す場合でない」

心のうちに肯きながら、何氣なく座を起つた。

「悟られたか」

待てと止むることもならぬ箱王は、尙人垣のうしろ傳ひに仇の跡を慕ふて行つた。

祐經は本陣に這入ると、間もなく一人の雑人が立現はれた。

「箱王殿と仰するか、われ等主君が見参遊ばすけに御座るで、此方へわたらせられ」

「お主の主君とは工藤殿か」

「奈何にも」

箱王は何とも答へず暫らく其場に突立つて居た。我が仇と視ふを承知で見参せうとの眞意はいかに、誘き寄せて刺さうとか。甘き言葉に圓めうとか。いづれにもあれ呼びかけられて退くべうもあらぬ意地づく

「おは宜くば、近づいて本望遂げう」



不敵な箱王は臆れたる風もなく案内さる、儘につかくと本陣の奥へ進み入った。

『お、箱王殿か……近うお寄りやれ。見參は初めてながら、お身が父とは従弟、左衛門祐經ちやよ。曾我にありと聞く母者から消息ども在るか喃』  
正座にあつた祐經は待兼ねたと云はぬばかりに手招きながら言葉をかけた。箱王はすいと進んで膝と膝を突合すばかりに坐つた。

七

恩愛の粹、慈悲の良。——腹黒き祐經は三十路を越して間もあるまじき屈強の身を油断なく構へながら、而も面に殊更の笑を泛べて舌滑らかに箱王の心を解かうとする。——箱王は不俱戴天の怨敵と膝突合せて我を忘れて懐中の短劍

を探らうとする右手を、祐經は何氣なき態に押へながら、左手を肩に加へて引寄せつ、

『同じ葉枝に連なれる一門のお身と我、圖らず對面の遂ぐるも偏に河津殿引合せ、又ひとつには當權現の御心がなあらう。……我等も目下は鎌倉にありて誰憚らぬ身の幸、及ばずながら御身が上にも力を添へて進ぜうに。精出して立派な法師にお成りやれ、當別當の跡繼がうとならば如何様にも取計らひ參らするで』

仇らしい親切ごかし。一言一句に箱王の腸は千切る、ばかり。

『汝、何の面あつてそのやうな』  
法師になるも、別當を繼がうも、先づ汝が首級父の墓前に供へて後の罪滅ぼしで。——と胸も張り裂くばかりであつたが、まざくとそれを仇に覺られて

は何かの妨げと心を静めて『忝けなう御座り申す』と應答した。祐經はやがて赤木の柄の小刀を鞘の儘脱きとつて箱王に授けながら

『御供の途中参らするものもない。粗末ながらこの品對面の印までに進ぜる。

曾我への便もあらば、母御前にも十郎殿にも宜しなに傳へて呉りやれ。何かと心も急がる、によつて、今日はこの儘別れ申す』

と云ひも終らず座を起つた。箱王は膝立直して飛菟らうとしたが、この時既に祐經は衝立の蔭を走つて姿を消した。

『この上は、夜に入るを待つての事ぞ』

と残念ながら本陣を出たが、宵かけて焚く篝火は晝の如く、遂に祐經に近く事が出来なかつた。

翌朝、祐經は頼朝の袖に匿れて三島へ降つて了つたのである。——霜に明け

たる山の御坊は、嵐のあとのやうに静まり返つた。——箱王はひた走りに本堂の前に額いて祈禱した。

『一命を召さるゝも儘、是非に再び仇に逢はせ給へ』

之ればかりを念じ暮しつゝも、箱王は夜毎女轉坂まで闇を辿つて力試しの巨石を投げ、曉白む落葉の樹々を對手にして劍を揮つたが、一念凝つては腕も冴えて、力量早業準の如く上達した。

斯くて又二年は過ぎ、箱王今や十七の天晴れ男一疋となつた。

八

箱根の別當行實はその歳九月六日を期して、箱王の爲に受戒剃髮の式を擧げやうと準備を急いだ。——いよくその前夜となつた。

木ヤ

『箱王殿、御欣び申し進ずる』

若き衆から羨ましげに祝はれて、箱王は熱湯を呑む心地で顔を反けた。

『出家となつた後では、仇に近寄る便も悪い。母の嘆きもあらうなれど、大望には替へられぬ』

斯く思ひ定めると、寂しう暮れし寺門から遁れ出て、嶮しき月の道を急きつ  
つ曾我の里へ馳せ降つた。——梟が啼く。鹿が啼く。爽かな秋の夜の空からは  
呷ぐやうな月の光が廣く明るく降り注いだ。——箱王は漸やくにして曾我の館  
の見ゆるほとり迄迎りついた。——こんもり茂つた樹立の陰に見ゆるのは、頼  
りない兄弟が安からぬ夢を重ねしその館である。——母は我が身の戻るとも知  
らずに在すであらう、思ひ設けぬわが身を迎へて、母も兄も如何に仰する事か  
——麻と素る、胸を抱いて悄然と思案に暮れた箱王は、幼な心の昔にかへつて

ひたすらに母の手前を憚かつた。

『先づ十郎殿に絶つて、母上へ詫言して貰はうに』

冷たい草履を踏みながらも、顔見られじと裏道傳ひに忍んでゆくと、山路の  
旅の餓と疲れにふらくくと眩惑がする。氣を取直して館の裏から登音を盗んで  
中庭に這入ると、昔の儘の庭石の蔭の風の暗きに淋しく蟲がすだいて居る。見  
ると兄の居室と定められた別房の窓に人影がある。

『オ、兄上ぢや。十郎殿ぢや』

飛び立つ思ひで馳せ寄つた窓の下から、我を忘れて

『十郎殿、兄上』

と呼んだ。——静かに書見に耽つて居た十郎祐成は、はつとばかりに驚いて  
膝立直した。

「ヤ、箱王殿でないか」

「お久しう御座りまする」

「先づ入らせ。何しに戻られたぞ」

手をとらぬばかりに誘ひ入れた兄弟の情に、先立つものは涙である。五歳一千日、逢ひ見ざりし夢のかけ橋辿り来て、圖らざりし秋寒の窓に手を執り合ふて泣かうとは。

「逢ひたうあつた」

「逢ひたう御座りました」

抱き合ふて、一縋りついて。

### ■元服の巻

一

箱王は具に下山の本意を述べ、母の怒りはありとても、目前仇の榮ゆるを見  
て、知らず顔なる法體に世を終る事の口惜しさを物語ると、十郎は幾度か肯き  
ながら嬉しげに聞入つた。箱王は更に、過ぐる年祐經に對面の折引出に送られ  
た赤木の柄の小刀を取出してその日の顛末を語り告げた。

「今一度男となつて祐經を討ちたさに、兄上を慕ふて参りました。荐つて母上  
の怒解けずばそれ迄、落葉を敷いて野に伏せるとも、再び箱根に登るまじく思  
ひまする」

「宜くぞ歸られた。祐成もこの年ごろ、箱根の空を仰がぬ事とはない。先づ日、箱王殿落飾あるべき由の報知に本意なく思ふてあつた。……いま斯く兄弟が打揃へば、翅連ねて望みの雲に入る事も出来る。……よしや祐成に不慮の病患あらうとも、箱王殿ある限りは本懐の遂げらるゝ。例へなき欣びぢや」

十郎祐成は、手づから暖い茶を汲み椎の實など剥いて薦めた。斯くてある暫らくの對座が、兄弟にとつては極樂境にあるやうな床しさであつた。語れど盡きぬ昔語りにも窓の外を氣支ひながら、二刻あまり忍んで居たが、やがて十郎は膝を進めて

「喃、箱王どの。……打明けて母上に縋ればとて、直ぐに許させ給はんやうもない。それよりも先づ各れへか打連れて、一門の長者に烏帽子着せて貰うまいか、お腹立ちも覺語、身にかへて祐成が詫びよう程に」

「御尤御座りまする。して誰殿を烏帽子親に頼みませうやら」

「三浦殿は叔母婿、土肥殿か、二宮太郎にか……お、それよ。北條殿が宜いわ。彼の仁なりや祖父入道殿が婿、われ等とも繋がる血縁、總てに便宜から……殊に時政殿は鎌倉殿にも舅、祐經も憚りあらうに……」

「それこそ頼んでもなき事。よしなに圖らうて下さりませ」

「さらば、館の誰彼にも氣づかれぬうち、直ぐさま出で立たうわ」

兄弟は密そりと館を脱け出で遙々と鎌倉へ志した。日が暮れる。秋雲に禽が啼く。宵の暗きに莊の砧を聞き捨て、道を急いだ。

兄弟が慙うして光の道を進んで居るうちに、箱根の別當から慌たしい使ひが曾我の館へ届いた。

「箱王殿、剃髪の前夜から在されぬ。若しや此方にども」

母御前の眉は曇つた。

二

『審かしい事、又しても心が、り喃』

折角の心づくしも仇となつたか、山の御坊への面目もない。又曾我殿の前もある。是非に探し出し因果を含めて山へ戻さうより外はないと侍女を呼んだ。

『十郎どの、疾う此方へと申せ』

侍女は寒い陽を踏んで長い廊下を戻つて来た。

『在せられませぬ』

『何としやつた事か』

自ら十郎が居間へ来て見ると、主とてもなき明るき窓に身軽き禽の影さすば

かりであつた。母御前の心には又ひとつ苦勞が殖えた。箱王が山を降つたその裏面に、十郎との密約でもありはせぬか、又兄弟打揃ふて祐經を覘ふ様の事があつたら何としようぞ。昔のやうに吐つたとて、大人びた今となつては一圖に思ひ止まりもせまい。若しその大望を祐經に氣取られて、鎌倉殿へ有らぬ事ども讒言されたら、兄弟の一命、その上に大恩ある曾我殿のお身にも崇らう。それを思ひ、これを思ふと、あるにあらぬ嘆きに悄れて、屏風の蔭に物案じの額を抑へた。

お山の別當には、何氣なう此方へは参らぬ旨の答を傳へ、姿を見次第送り遣はすべう篤ろに文して詫を述べて置いた。

今日は戻るか。

明日は戻るか。

軒へ霜葉の落つるにさへ耳引立て、寝もやらで待つ甲斐もなく、その後數日は何の音沙汰もなかつた。八日目の黄昏、途中まで見張りに出して置いた家僕が、宙を飛んで馳せ戻つた。

「十郎殿お戻りで御座ります」

母御前も、讃岐の局も口を揃へて

「お一人でか」

と慌しく訊ねた。

「何誰やら、お連立けて御座りまする」

「扱は箱王も共にか」

子が可愛さの氣も軽く草履をはいて、横木戸の椎の樹蔭まで立出でた。――打見れば、遅ましき二頭の駒に鞍置かせて、染の手綱も鮮やかにゆらりと

打たする先なは紛れもない美男十郎祐成である。後に續いて遅ましい肩聳やかして、額も廣く晴やかな眉一文字に哄笑ひしながら駒を打たする若殿原は何處の誰ぞ。

やがて間近うなる儘に、母御前は瞬きもせず眺め入つたが、後なる殿原が見覚えのある箱王と知ると其場によろめき倒れた。

三

餘りの失意に喪心した母御前は、纏て讃岐局の腕に支へられて物憂き臉を見開いた。

「お氣強うあらせませ。お待たせの箱王どのも戻らせられました」  
慰めらるゝ身は辛や。母御前ははふり落つる涙を拭はうともせず、よゝと泣

く音を噛みしめて差うつ向いた。——その有様を遠目に見た二騎は、駒を煽つて乗りつけて来た。先づ祐成はひらりと降りて近づきさまに

『母上、何とせられました』

と案じ顔に聲かけながらこれも、鞍から降り立つた箱王を顧みて

『御挨拶申されい。御不例と見ゆるぞ』

と取なし顔に眼で知らせた。物に怖ぢぬ箱王、今は鎌倉の老臣北條時政を烏帽子親に加冠の式を済ませたる五郎時政も、有繋に母の心を推して兎角は進んで筋はる術も知らなかつたが、何時まで斯くてあるべうもないので、氣を取直してつと寄つて式臺した。

『お久しうお目通りも仕りませぬ。箱王で御座りまする』

『なに、箱王とや。……箱王ならば法衣着て亡き御父の冥福を祈らう筈。……鹿

毛の駒、白覆輪の鞍置いての男姿を見ようとて箱根には上らせぬ。……おぞましい事云はれな。耳が穢れぞ』

素氣なくも云ひ捨て、母御前は其の儘邸のうちへ匿れて了つた。椎の葉ははらくと散る。

取残された兄弟は、顔見合せて暫らくは言葉もない。

『十郎殿、詮ない事して母上に嘆せたわ。……何としようぞ』

『詮ない事とは喃』

『生じひ男となつたばかりに、悲しい目に逢ひまする』

『悲しいとて今更に何とならう。母上の笑顔を見ん爲なりや、再び箱根へ戻る

氣か、大望を思捨つるか』

『そりや、なりませぬ』



『一旦の不首尾ども何あらうぞ。御父の爲に叱らるゝと思へば、心にかくる要もない。……再應申し入れて許されねば暫らくは打連れて漂泊ひ歩かう。伊豆相模に數多き縁者の軒に、雨も凌げる、露も降らぬ』

兄の祐成は斯く云ふて時致を勵ました。さらばと駒の手綱を裏戸の椎の枝に結び置いて、兄弟は邸に這入ると五郎時致只ひとり母御前の居室の次へ兩手を支へた。

『お心に背きましたる箱王、改めてお詫び聞え上げする』

四

これは又心強さよ。障子隔て、すゝり泣く氣勢はあり乍ら、いく度か物を申すに只ひと言の答へだもない。堪り兼ねた五郎が膝行り寄つて障子細目に滑ら

せると、母御前は内からはたと閉て切つた。

『道を忘れた心の旅人、面も見まい。聲も聞くまい。……喪せたる父の冥福も吊はず、心寂しう永らふる母に嘆きをかくるほどの不孝ものに面を逢はする要はないに……』

打慄ふ聲を聞きたび、五郎は膽も縮まるばかりであつた。取つく島もなく、五郎は悄悄と其場を起つて兄の居室に戻つて來た。

『首尾は何とあつた』

『散々で御座りました』

『お對面ども給もらぬか』

『お言葉さへ給もらませぬ』

十郎は腕を組んだ。五郎もうな垂れた。對座黙々として窓外の風を聽いて居

ると、空の遠きに野の鳩の聲が聞える。

『彼の鳩のやうに、よしや落穂を拾ふても命をつなぐ事は出来る。只空しう生きてあつたとて、それが性ある人間の譽とならうか。：野にも寝よう、霜にも濡れよう。無惨と短かい世にあらうより、われ等は光ある死の道を歩まう。やがて祐經の首級を土産に、地下九泉の父上に逢ひ参らさう』

『まこと、今の悲しさも一葉の霜、陽に溶くるまでの我等が命を惜しまねばなりませぬ』

母の心に反いたと云ふ寂しい心の半面には、怨み葛の葉蔓行びてゆく復讐の決心が深くく根ざした。

『さらば、去のう。暫らく母上御眼から遁れて、御機嫌の直るを待たう』  
『数々御心煩はせませぬ』

頼み勝に兄弟は館を出ると、裏戸の椎に繋ぎたる手綱をはぐして、ゆらりと鞍に跨がった。——遠ざかる蹄の音。——やがて夕の道の彼方に消えてゆく頃母御前は灯しも入れぬ几帳の蔭に膝を崩して、岐讀局と蕭やかに打語らふて居た。

『打連れて去んだと云やるか、さりとては情の剛い。この上に尙妾を泣かせうとて……』

『晴れて世にあるお身ならば、何ほう頼母しき殿振。：夫れもお涙の種とあつては詮御座りませぬ。聽てはお戻りなされませうに、御心況くあらせませ』

その夜の泊りを案じつ、母が夜空を仰ぐころ、兄弟は何處の誰が館に駒を乗捨てたであらうか。伊豆の秋はや、に深く、遠山影に砧打つ聲ばかり淋しい闇を揺つて居た。

五

昨日は三浦、今日は和田。兄弟が駒を並べて訪ね行く親戚の館は、相模にも伊豆にも数々あつた。

『親はなくとも子は育つとか。立派にお成りやつたぞ。悠りと在せ』

伯母婿、従弟、とり／＼に心を傾けて世に儂なき兄弟の境遇に同情しながら弓矢を送るもの、太刀狩衣を引出にするもの、下へも措かず優遇して呉れた。兄弟は泌々人の情を欣びながら、ちぎれ雲のゆく／＼に漂泊ひ歩いたが、曾我なる母の嘆きを思ふては胸曇らす日が多かつた。十郎は屢々音信を認めて人に托し、母への詫を申入れたが、その返り事は何時までも解けなかつた。

『箱王は七生までも勘當ぞ。再び母と逢見ん事叶ふまじきぞ』

祐成は幾分母を怨みる心にもなつた。

『鎌倉殿の咎めとや、曾我殿の身にかゝる災ひとや。それ等ばかりを憚かつて母子が情を捨てさせらるゝ御心強さ。……十郎を兄と思へば、五郎をも弟と思し召せ。この世の義理は如何あらうも、われ等は眞實の兄弟で御座れば、袖を別たうとは思ひませぬ』

五郎を捨つるならば、十郎をも捨てさせ給へ。——とまで云ひ送つて二月餘り、母の許へは寄りつかなかつた。——母御前は種々に思ひ惑ふた。遁れがたき柵に恩愛の逢瀬を断つたも世上の聞えのあればこそ。若し憚りのない自由の境遇なら、何の／＼五郎はわが子、男となりし引出の装束夜もすがら縫ふても着せうに。さり乍ら、五郎は母に背むいての元服、當座の勘當は許されぬ。——さりとて兄弟一緒に親戚の館の恵みに生きては、曾我殿の面目にもかゝは

る儀、是非に兄弟を引離して、祐成には妻を娶らせ、機をみて五郎の處置をつ  
けねばならぬと思案して迎ひの文を差送つた。

十郎と五郎は、久し振に館に歸つた。

打晴れての對面はないけれど、襖隔て、母の聲音を耳にする度、五郎は切て  
もの心ゆかしに淋しい笑を洩した。母御前は十郎祐成を呼んで妻帯を薦めた。  
祐成は再三辭退したが、何と云ふても赦されぬので、これにはほと／＼持餘し  
て

『時致どの、宜い智恵でもあるまいか』

と相談を持かけた。五郎もこれには眉を擧めた。女の髪は大象も繋ぐ例、若  
し祐成に心許せし女房ども出來て、末ながき戀の奴となり果てなばそれこそ大  
事、母はそれを目的にして十郎の心を鈍らせようとする。五郎はそれを杞憂し

て十郎の心を他へ逸さうとする。

一つの花の影めぐる蝶の翹にも、朝と夕の心惑ひはあつた。

六

繪にせま欲しき青額。眉やはらかに唇紅き十郎祐成の殿振を垣間見て、竊か  
に心を寄する姉達が親戚のうちにも澤山あつた。母御前は讃岐局を使として其  
處此處の館の奥に、十郎が妻たるべき蕾の花を選らしめた。この噂を傳へ聞い  
て、我こそ祐成殿を婿にせうとて態々申入る、大名も數あつたが當の十郎祐成  
と弟の時致とは、額を鳩めて遁るべき道を求めた。

『いかに兄上。本懐遂ぐる爲には世の讒りも忍ばねばなりません。小磯、大磯  
さては酒匂に遊君と申すが御座れば、それへ通はせられ。明暮の放埒世上へ聞

ゆれば自づと婚儀の沙汰も消え、又ひとつには祐經が本國伊豆への往來に近寄る術も在さうに」

祐成もそれよとばかり肯いて、態と華手やかに装束してしやなりくと大磯小磯の宵月に浮れ歩いた。

その歳霜月の或日であつた。十郎は駒にも乗らず大磯の宿に差蒐ると、時雨めく空も暗くばらくと降り出して來た。生憎に雨具も持たねば、つと立寄つて名知らぬ軒に晴れ間を待つた。すると扉のうちから幼ない女の童が立現はれて笑ましげに袖を控へた。

「此方へ入らせ。お茶など參らせませする」

「それは忝ない。宥され」

雨に悄れし襟を直して内に入ると、こゝは大磯の長者菊鶴が宿、名にし負ふ

廣き館の奥深く、繪に見るやうな美女が懐かしげに出で迎へて

「俄かの雨にお難儀とお見受申して、卒爾ながら御迎へ致しまする。先づ此方にて御寛ぎなされませ」

鈴ふる如き涼しき聲音。——両手を下けて物云ふ度に、髪に焚きたる香が揺れて、金銀の縫置いたる小袖に帯に、春ならなくも花の佛消えも入りたさ風情である。

「忝なう御座る」

祐成は草履を脱いで案内さる、まゝに奥まりたる一室に打通つた。

僅か濡れたる雨の松に潮風も吹き落ちて、欄干に見る暗緑の海には淋しや帆影ひとつだもない。こゝら邊りの家構へには相應はしからぬ静けさに包まれて部屋の調度は目覺むるばかり鮮やかであつた。

輕き褥に膝を埋めて待つ程もなく火桶が運ばれ、香に立つ加減も舌によき茶も運ばれた。——冬牡丹の紅きを活けたる床に竝んで、琴、胡弓、碁盤、貝合せの類が正しく置かれてある。

十郎は好色心に四邊を見廻しつゝ、靜かに茶を啜つて居た。

### ■大磯の卷

一

戀は殊更、自他の間に萌すべき好憎の念は初對面の印象に宿るものである。ちらと瞳にうつりたるその倂の瞬間に、十郎はこの居室の主人なる女性に惹つけられるやうな懐かしさを感じた。

何人の心ゆかしに琴柱を渡る清き唄や唄ふらし。いつくの誰と後朝の名残惜みて、袖絞れとや胡弓も弾きけむ。心憎き振舞よ。——と思ひながら待つところへ、夢みる如き衣摺れの音靡かせて、圍ひの屏風の端にすらりと立つた一朵の花。

「憤みもなう端たなきお目もじ。御宥し下さりませ。妾は當家な娘虎と呼ばれし卑しきもの、末永うお心の隅に置かせられませ」

「拙者は曾我十郎祐成で御座る。圖らずも雑作をかけ申す」

接ぎ穂なき羞らひの面伏せに、嬉しき顔を見合せて黙せる仲へ、虎や申附けたりけむ、幼なき女の童が塗の高膳酒添えて、恭しく運んで來た。

「お寒さの忘れ草、酒ひとつ聞召しませ」

取上げてさす盃が、虎の白魚の指を離れて十郎の手に渡つた。なみくと酌する戀の美し酒には、淺からず濃き女の心が籠つて居た。

十郎は酔ふた。虎の情に酔ふた。

堪へがたき頬の紅を抑へながら、莞爾やかに笑を湛へし虎の眼許には、眞ぞ命も物かはとの情が溢れて見えた。

「重ねて過ぐされませ」

「強う酔ふた。も叶はぬ」

「さりとは興の薄い。——座に堪へぬまで召さるゝが殿原の憂晴らしとやら、心置きなう召されませ」

「ほ、難題な。それ程の手なみもない。酒參るさへ稀々ぢやに」

ふと十郎の心は覺めた。——世に榮ゆる若殿原とは事變る兄弟の身の空。例へば宿り木の儚なき春に逢へるに似て、人の情に丈伸びし境遇では、滅多に遊里に酒を汲む餘裕とは無かつた。殊には母の心づくしを仇にせうとて、弟時致に薦められて浮かれ小袖の人々に立雜つては居れど、ゆめ我からの色好みでもなく、菩薩の笑に魂を溶かさうとの通ひ路でもない。

「時致も待ちつらうに」

と考へると、恚うして盃を重ねて居る事が如何にも心苦しかった。

「はて、雨は晴れぬやら」

眼をうつす戸外の松に、冷たい雨は絲の如く紊れ降つて居る。

「もう去なれうとか」

虎はおどくとして十郎の膝に取縋つた。

二

祐成の小袖は遂に虎の手から離れなかつた。引とめらる、儘にこの夜は大磯の菊鶴が館に泊つた。翌朝もやらずの雨は寒く淋しく降り明けた。虎は尙別れともなけに

「美き人の待たせらる、でか、何しに戻りをお急ぎなされまする」

と怨じ顔に寄り添ふた。

「美き人なぞあらうか……母御前と……弟と……」

「弟君と仰せらる、は、時致殿で在しまするか」

「時致と……何時の間にそれを知りやつた」

「ホ、、、、大磯小磯酒匂のあたり、お睦まじう駒を並べて往き戻りのお姿、誰も彼もあれこそ會我十郎殿五郎殿とお噂申しまする。……虎とてもそのひとり、先より垣間見の胸轟かせて」

「過分の思ひ入れ、嬉しう禮を申すぞ」

「その禮は要らぬこと。明日にもあれ、時致殿連立つて入らせられませ」

「心得たぢやが、時致は荒氣なもの、溫和しう座にあるまい」

「そこを首尾よう繋ぐが情、眞實をこめたりや千曳の巖も……。女ごころは深



十一巻

う御座りまする。不肖な虎、忘れて給もりまするな』

戀知り初めし虎御前は十七。祐成は水々しさの二十と云ふに、謀略のない心の鏡に、朧夜草がなよ／＼と絡れ合ふた。

忍ぶ夜の渚の月に、千鳥の聲の寒さも薄れて、夜釣の舟の篝火が春の朧に艶めく頃、十郎はその夜／＼の首尾をして大磯の虎が許へ通ひ詰めて、一宵來ねば燕の箭文、虎から迎ひの使奴が曾我のあたりをうるつくのを見かけると、寛闊な五郎は自ら仲立して兄の袂へ文を投げ届けた。

母御前も乳母の讃岐も、甲斐なき事と力を落して十郎が嫁探しの沙汰も止めたが、五郎は未だ打解けて母への對面は許されず、見て見ぬ振の兄弟の起居を安からぬ胸の底に疊んで置いた。

建久三年の春も暮れて、蝸の聲啼き暮る、八月の上浣となつた。磯打つ浪

に風も涼しき砂丘を、淨らかな生絹を靡けて華やかに太刀佩いたる殿原が靜かに大磯の方へ歩いて行く。これは十郎祐成が虎御前の許への通ひ路であつた。行きすりの裾や染めけむ、灌茄子の花が紫に咲いて、夕月の仄かに匂ふ後から呼ぶ聲がする。

『オーイ、オーイ。』

はてと其場に立どまつた十郎は、磯馴松の蔭に身をよせて屹と後方を眺めやつた。人影が宙を飛んで近づいて来る、何者。

三

審かしの人影よ。何しに我を呼かくるぞ。と祐成が油断なく待つ處へ驅つけたのは意外にも五郎時致であつた。

「何事ぢや、母上の首尾ども損じての迎ひか」

「否、そのやうな儀では御座らぬ。我等兄弟が大事……」

「ヤ、大事とな」

「密かに知らせ呉れた仁が御座つたで、兄上の途中を案じてお後を慕ひ参りました」

「どの様な儀ぞ、誰がそれを知らせてお呉りやつた」

「それが不審、明らさまに氏名認めて無いが却つての情誼、いづれは亡き父眠懇の仁と覺えまする。……御覽せ」

と取出した一書。それは先刻に誰とも知れぬ旅の武士が、里の童の手に託して、兄弟が館へ届けさせたもの。十郎は音ならぬ面持で月の光にその文を読み急いだ。

五五

その一書には恚う書いてあつた。

「お身達の存意誠に殊勝の到り、それと感づいた工藤祐経は、如何にしてもお身達を亡きものにして夢安らかに眠らう爲、八幡七郎行宗はじめ有名な荒武者六人に旨を含めて大磯小磯さては逢瀬の虎が館のほとりに忍ばせある由を聞いた。行宗はお身達が父河津三郎殿を遠箭にかけた三郎行氏の子ぢや。行氏がお身達一門のために殺戮されて後は、行宗も又お身達に深き怨みを抱けるもの、ゆめ油断して彼等の良にかゝり給ふな」

祐成はいく度か背いてその一書を巻き納め、扱て静かに五郎を顧みた。

「この状にある如く、我等は薄氷の上にある石ぢや。心は許されぬ。今宵かぎり虎が許へ参る事ふつと思ひ止まらうに」

「何の、何の兄上」

ワハ、と哄笑して刀の束を丁と叩いた。

『われ等太刀には不斷の怨が籠つてある。行宗とやら、父上を遠箭にかけし行氏が子とあれば押かけても討取るべき奴、我等へ規ひ寄るとは幸ひ、一撫でに薙ぎ捨てまする迄』

太く濃き眉を動かして、一文字の朱の唇から吐き出す時致の言葉には、小氣味よき力が籠つて居たり。

『さらば、連立つて行なうか』

兄弟は月の松蔭を離れて、涼しい風に吹かれながら大磯の虎が許へ赴いた。

四

その夜の夢を鶏に啼かれて、十郎五郎の兄弟は大磯を立出で、一旦館に立戻

つてから厩の駒を曳出して心ゆかしの青葉の道を早川の土肥彌太郎遠平が許へ訪ねて行つた。遠平は兄弟が爲には伯母婿である。此處に五六日を潮浴み暮していざと別れて立出でた頃は、八月二十三夜の月が薄く、淺黄の空に染め出されて、道もせの露持つ草に翅磨る音の聲さへ聞かれた。兄弟は駒を竝べて打語らひつ、廳で酒匂の驛に入つて、偶ある茶店の軒の樹に駒を繋いで澁茶を所望した。

『静かにも爽かな月ぢや』

『胸の底まで澄むやうに覺えまする』

何氣なく寛いて居る折柄、つと其處へ這入つて來た猛々しい武士があつた。

『宥され』

氣も軽く辭儀をして腰打かけつ、同じやうに茶を所望した。月は明るく眼路

に蒼んで、往來絶えたる街道には軽い夜風が吹き満ちて居る。

「去なうか……」

十郎が腰を浮かせる時しも、蹻音を盗んで忍びよつた五六の人影が、表の軒に身を沈めた。

五郎も無言で起ち上つた。その時傍に茶を啜つて居た武士は

「あいや。人違ひならば御免あれ。若しや曾我の若殿原には在さぬか」

と問ひかけた。由緒のものかと十郎が回顧つて

「いかにも、して貴殿は」

と答へる瞬時、隼の如く躍りかゝつた件の武士は

「遁さぬ。観念せ」

と喚きながら一刀の鞘を拂つて眞向から斬つて蒐つた。あはや血煙、二つに

12月22日

なつて倒れたかと思ひの外、ひらりと退つた十郎は

「推参」

と抜き合せてデリ、と進んだ。荒氣な五郎時致は太刀の束へ手をかけて伏勢

もやと表を睨んだ。——チャリーンと響く鏗音を相圖にばら／＼と表から躍り

込んだ五六人の切尖が薄のやうに戦めくのを、五郎は太刀を振冠つて

「蛆蟲奴」

と逆とばかりに斬り靡けた。十郎は最初の一人と斬結んだが、なよび姿に似

もやらぬ腕の牙は、やがて美事に眞額から斬り伏せた。この間に五郎も二人の

敵に血を浴せた。

五

閃めく太刀、血潮の飛沫。——思ひの外なる兄弟の手練に斬り捲くられた五人は、命惜しさの浮足立て、どつと戸外へ退かうとしたが、この時早く十郎は當の敵を袈裟斬に斬つて落し、五郎は韋駄天の如く廻ぐるを追ふてその二人を取つて押へた。

「吐せ。何ゆゑの狼籍ぢや」

焔の息を浴せられて、捕はれの一人は悲しい聲を振絞つた。

「われ等何の怨みもあるものでも御座らぬ」

「怨みない汝等が、何しに不意に仕かけたぞ」

「頼まれまいた。……餘儀ない仁に語られはれました」

「誰ぢや。その頼うだとは誰ぢや」

「八幡三郎殿に……」

「ヤ、扱は彼奴が三郎か」

五郎は逆と太刀を揮つて、其奴の首を打落してから血染の袖を翻へして馳せ戻つた。

「兄上、此奴が八幡三郎ぢやけな」

「されば昔赤澤山で父上を射たは此奴の親ぢや。……重ねぐの怨、覺えたか」

左右から打込む太刀に血は噴いて、腥い風の遠くから里の人の灯の群が近づいて来る。

「これは曾我十郎祐成、同じく五郎時致無法人を成敗致した迄ぢや」  
刀の血を拭ひ、寛の水に手を淨めて里正に一埒を吾け、兄弟は悠々と駒に跨がつて月照る道を歩ませた。

この事は直ちに敵祐經の耳に入つた。右府頼朝へ讒言してと思はぬでもなかつたが、伊東、河津、曾我に繋がる縁者の手前を憚かつてそれもならず、前にも増して出入を嚴重にし、鎌倉から伊豆への往來には、常に百騎五十騎を召し具して束の間の油断もなかつた。

その後祐經の手から放たれた刺客は、夜となく晝となく兄弟を附け廻したが兄弟にも隙はない。殊に兄思ひの五郎は、形に影の添ふごとく十郎の後を慕ふて、虎が許に酒汲む隙も決して離る、事がなかつた。

『曾我の殿原は松葉のやうに、いつも片葉で在さぬさうな』

遊君たち迄に慍う云ふて笑はれる程睦ましかつた。——十郎が虎の許へ通ひはじめから前後三年になつた。短かい夢の曙を願みては、徒らに敵を見捨て、遊君の笑顔を見る事が心苦しかつたけれども、機熟せぬのを什麼する事

も出来なかつた。

建久四年の櫻咲く日。兄弟は大磯の虎が許で思はぬ人に對面した。

六

その日。兄弟は常の如く虎が許へ赴いて心靜かな春の晝湯に浸りなぞして居た。日脚も軽く花に汗ばむ午ざかり、大磯の菊鶴が館の門へ二十あまりの供人を召し具した五六騎が駒を繋いだ。

『和田殿のお入被せぢや』

『朝比奈殿も御一緒ぢや』

ざわ／＼と小婢の私話を聞いた兄弟は、顔見合せて虎を顧みた。

『左衛門尉殿も、三郎殿も、屢々こゝら邊りへ見ゆるか』

「否、稀々より見えられませぬ。この度は春の湯治の戻りとやら聞きました」  
「ほう、う。……湯治とか、何とわれ等も躑躅咲く峽の湧き湯に胸の惱みを洗いたいものぢや」

「胸のお惱みなど、何在しまする」

「逢へば別れ、別れねば逢ふ夜の首尾に興が薄い。斯くてある花の盃、夜ともならば名残の雫汲まねばならぬハ、ハ、」

淋しく笑ふ十郎の顔を見上げた虎の瞳には、すでに涙を醸されて居た。

「ぢやによつて、平素の希ひ、いづれへなりと召連れて下さりませ」

「……宿り木の西へ東へ……それもならぬわ……」

祐成と虎とが遺瀨なけに打怖れると、五郎は深く眉を擧めて忌はしげに眼を逸らした。

こなた館の廣室に一座せる和田左衛門尉義盛、その子朝比奈三郎義秀（十歳）以下時めける一門の誰彼がすらりと居流れてさんざめく酒興の折柄、義盛は思ひ出したやうに

「傳へ聞くこ、な館には虎と呼ぶ遊君があるけぢや。招いて興を添へまいか」と義秀を見た。朝比奈も頷いた。

「その虎が許には、十郎殿繁々通はせらる、さうに聞きまする」

「十郎とは……曾我のか」

「御意」

「これは又一段ぢや。誰ぞ虎が許に参つて、十郎殿在さば共にと申せ」  
遊君はその座を退つて虎の許へ旨を告げた。

「和田殿は伯母婿、義秀殿とは相識の間柄、辭退は禮で御座らぬ。渡らせら

れ』

時致に觸まされて、兄の十郎祐成は面はゆけに虎と連立つて和田の座敷へ赴いた。それと見ると

『久しい喃、先づ此方へ』

義盛は笑ましげに手招ぎした。

七

十郎は悪びれもせず、すいと進んで盃を受けた。虎は傍からなみくしと酌をとつた。義盛は上々機嫌で

『美事々々』

と囁し立てると、朝比奈が

『重ねられ』

と朱の大盃をさした。和田父子は平素から兄弟に情を運んで呉れる。兄弟も亦嬉しき事に思ふて館へ厄介になつた事もある。隔てなき心と心、祐成は快く酔うた。

『母御前に變る事ども在さぬか』

『幸に恙も御座らぬ』

『久しう御意得ぬ。嗚なお身達成人を喜ばれつらう喃』

慰め顔のそれが却つて十郎の胸には應へた。五郎時致の勘氣、それに繋がる我身の不興、束の間の酔が沈むと見てとつた虎は、然り氣なく酒を薦めようとしたが近くに盃が見當らぬ。

『お盃なら、妾から參らせしまする』



『こちらからも進ぜる』

一座の男女は幾分の嫉み心から祐成と虎の前へ船の着くやうに盃を運んだ元より深く嗜まぬ十郎は、惱ましげに額を押へてこれはくくと持餘して居る。虎とても同じ事、花を揺れ吹く風の近くに軽き汗さへ覺ゆる風情であつた。

『さ、召されませ』

『すんとお干し召さ。お流れ頂戴、御祥福にあやかり申したい』

企みとてもない酒興ながら、兩人にはこれが強う迷惑であつた。その時、次の室から怒を含んだ鋭い聲が襖越しに席上へ投げられた。

『その盃、時致が受けう』

登音荒くつかくと打通つた五郎の左手には、鞘走らんばかりに豪刀が提げられてあつた。

『無理強ひの馳走。盃と限らぬ。兄に代つて、何なりと對手致す』

仁王立に突立つて、はつたと睨めた屈強の面魂に、一座は思はず首を縮めた。

『五郎殿、時致殿』

呼びかけられて気がつく、主座の義盛と義秀が此方へと眼で知らせる。

『これはく。立はだかつての御無禮偏に御宥され。その砌は、数々の御厚志に預かりました』

改まつて座についた五郎の口上は、打つて變つて尋常であつた。——思へば根もない酒の戯ぶれ。それを真面目に腹立てたのも兄を大事と思へばこそ、頼りなき兄弟の面目を思へばこそ。

『五郎殿、今までいづくに在せられた』

「お次に控へ居りました」

「さては、噂にも聞く戀しい同士、十郎殿と離るゝが辛う見ゆる喃」

「寢ても、覺めても、死出三途まで兄上お供致しまする」

それ聞いた十郎は堰き上ぐる嬉しさに眼を潤ませた。義盛も武遍一圖な朝比奈もほろりとして盃を下に措いた。

八

「頼もしい事喃、有繫に河津殿忘れ遺品ほどある……大切な身ぢや、厭はせられ」

「われ等も頼み甲斐ある兄弟の欲しう御座る」

和田父子は沁々と兄弟に盃をすゝめた。遊君は絃を鳴らし、扇をかざして

興を添へた。やんやんとさゝめくうちに春の日は静かにうつろひ、やがて夕影そよ／＼と梢の雲に絡はつた。この時遅ればせに座に連なつた遊君龜若の間はず語りに

「下の宿にて江間殿に引とめられ、工藤殿も一座しての酒宴、他愛もなう酔ひました」

と云ふのを聞いた、五郎が十郎に眼配せして座を起たうとすると、正座の義盛は意ありけに膝を進めた。

「先頃手に入れた若駒幸ひ二頭曳かせある。濱風に一鞍攻めて見られい」

「忝なう御座る」

工藤と聞いて座を起つ兄弟。義盛は武士の情に敵を追ふべき若駒を恵んだのであつた。

「拙者手綱を調べて進ぜう」

朝比奈三郎もそれと察して兄弟と共に庭前に出た。——咲いた櫻に駒繫ぐ人を怨みそ、散らねば花の風情なきに——朝比奈は鹿毛と茸毛の遅ましき二頭の駒の手綱を解きつ、

「われ等父子の乗料、ずんと驅け申すぞ。……鎌倉上りの工藤殿、いまの先刻立たれたけちやで、金屋川の邊ともあらう。……急がせられ」

兄弟はひらりと鞍を跨いだ。

「お待ちやれ。……弓矢は」

「借用致したい」

「心得申した」

重藤の弓、白羽の箭。——忝なしと手にとつた兄弟はどつとばかりに駒を煽

つて、櫻の蔭から驅け出した。

「今日こそは」

遠箭にかけて射て落さうと驀然に後を追ふと、戸上ヶ原の草霞む彼方に、百騎あまりの人馬の影が遠く打連れてゆく。

「遺憾ぢやが、江間殿供人と併せての多勢、箭も届かぬ」

十郎は本意なげに手綱を控へた。

「箭が届かすば斬崩すまで」

五郎は尙進まうとする。

「それこそ無謀ぢや。けふはこの儘戻らうわ」

口惜しさはいかばかり——のめく大磯へ戻るよりはと、その儘兄弟は三浦義澄の館に向ふた。

春の夜の圓かな月。——兄弟の心は淋しかった。

九

捨つる鬼、救くる佛。兄弟が翼を憩める一族の人々は、心を寄せて慰めて呉れた。三浦の館の主義澄は兄弟の爲には伯母婿「宜くぞ見へた」と迎え入れて、朧月夜の高樓に盃を舉げて酒宴を催ほした。

「鎌倉殿近く浅間の裾野を狩らす筈、お身達の弓勢試むるには屈強ぢやの」言葉尻を濁らす意には、この機を通さず紛れ込んで工藤の陣に忍べとの誘ひの謎が含まれて居た。

「初めて承はる」

「是非にわれ等も、参りたう御座りまする」

胸轟かす兄弟は人なき居間に退いてから、寢もやらず狩場の供の才覺に心を碎いた。

「せめて四五頭の馬、僅かの供人どもあらば喃」

「心弱き事仰せられな。古びし簀、破れし笠に身を潜めて勢子の群に立雜るこそ却つて敵の油断に乗ずる便宜で御座るに」

「それも道理。ぢやが、夜草の露に裾濡らす勢子とあつては、駒にも乗れぬ弓矢も持てぬ」

「駒なくば徒歩、弓矢なくば太刀、一念を篝火と焚いて近寄るに難は御座らぬ思ひ立たせられませ」

と五郎に促がされて、十郎もその氣になつた。——三浦義澄にも夫と告げず、曾我の母へは三浦あたりに在る態に告げ装ふて、兄弟は密かに旅の準備を急い

だ。  
鎌倉大將軍頼朝は、百餘頭の大小名を従へて淺間の狩へ發足した。時は建久四年彌日末の一日。泊りくくの炊ぎの煙雲と靡けて、競ひ立つたる幾萬騎が家士勢子を率て行く光景は、霞の繪卷若草の風にほぐれて、花も人も豊かに見え

た。  
兄弟も遙か遅れて名もなき勢子と味氣なく草に寝ながら、何時しか武藏野を過ぎて關戸の宿に着いた。

『明けなば入間野の鳥狩ぞ』

陣々へ夜觸れの衆が廻り歩くと、兄弟は存分に足固めして黎明を待った。

禽狩は興あるもの、巢立ちの禽の羽を縫ふ弓取りの伎競べに、我もくと華やかに装束して駒を飛ばせたが、兄弟は終にその日祐經の影も見かけなかつ

た。

夜毎々々の慢幕は花に濡れつゝ、頼朝の勢は急がぬ旅の野を過ぎて上州路に入つた。——元より尙武を基とせる催ほしではあるけれど、その昔の習慣として諸大名は酒を積ませ、美女を連れての旅。暮れては獲物を肴にして酔後の夢を樂むなかに、兄弟は身も心も餓ゑ疲れて、驗合はする刻すらも惜まれた。

十

大仕掛な狩野の廣さは、今の世に見られぬ雅びにも雄々しいものであつた。花を潜り霞を衝いて馳けめぐる人馬は、長閑な炎陽に揺れつゝ、日の沈むまで野山に充ち溢れた。

碓氷峠を打越えて三原野に着いてから七日の間、春雨の煙るがなかに狩り立

てた獲物は積んで山となつた。その満悦な陣中の動搖めきを他所に、兄弟は手をとり合ふて打嘆いた。

『今朝ちらと見かけたなれど、磔の如き馬の疾さ。近寄る事もならんだわ』  
『お力落されな。これより赤城、奈須野を狩らするけで御座れば、機會はさわに御座らう』

強ひて慰め聞ましなから、何處までもと狩倉の後に續いた。——同勢は淺間の麓を出發して、鈴かけの信濃國原後にして利根川を越え、松原つゞき赤城山の麓を七日間狩り盡し、更に下野に入つて宇都宮に三日奈須野が原に七日。その長らくの狩倉も、遂に／＼兄弟は只の一度も太刀に手をかくる事なしに、悄然として四月二十八日に空しく鎌倉に辿りついて再び三浦の館へ厄介になつた。  
『弓矢神にも見離されたか』

人なき折に膝突合せてつく／＼と嘆き侘びたが、天の祐か、思ひがけなき吉報は直ちに兄弟の耳に入つた。

それは富士の巻狩であつた。  
剛氣無双な頼朝は、月餘りの旅の装ひ解く間もなく、鎌倉に戻りつくと梶原景時を召し出した。そして富士の裾野を狩るべき旨を大小名に觸れしめた。

『これは又興すぎる。馬も人も疲れ果てたに』  
家戀しさに愚痴を云ふものもあつたが、大將軍の思し立、誰一人としてお暇を願ひ出るものすら無かつた。馬を洗ひ蹄を切り、弓を張らせて勢ひ立つた同勢は、僅か四五日鎌倉に憩ふたばかりで、直ちに裾野へ押出す事となつた。

兄弟は雀躍して欣んだ。  
『裾野ならば遠からぬ路、一頭の駒で事足る。この度こそは討止めう』

さらば！と三浦の伯母にも別れを告げ、遅れじと急ぐ途中三浦與一（兄弟の従弟）の許へ立寄つた。十郎は與一を味方に頼まん下心であつたが、初めから五郎は不同意で、

「與一如きへろく武士。命を捨て、義に同するなぞ思ひも寄らぬ」

と卑すんだが、十郎は別に思ふ處があるかして、兎にも角にもと與一の館へ駒を繋いだ。

十一

一つ種なる苗にさへ、異なる花の咲き出づる世ぞ。三浦與一は兄弟の爲には紛れなき従弟であるが、兎角は事なく百年の齡を念ずる世の常の若殿原であつた。さりながら、十郎はわが身に比べて與一を然までの腰抜けとは思はず、こ

の度の狩を幸ひ語りふて仇討の助勢を頼まう爲に訪づれたのであつた。

七分の若葉、三分の花、紅き葎散る庭の樹蔭に床机を据ゑて、與一は兄弟をこれに招じた。

浅間麓の狩の思ひ出。それこれと、興ありけに話が進むと、十郎はやがて膝を押進めて與一に大望を打明けた。

「何と、與一どの。われ等この度の狩を幸ひ、裾野の陣に祐經を討ち、父の妄執を晴さうする所存ちやが、お身力を添へて給もるまいか」

屹と鋭く見詰める瞳には、動かしがたき覺悟の色が見えた。

「ヤ、何と云はる、」

與一は俄かに狼狽へながら

「そのやうな無謀な企て、一味なぞ思ひも寄らぬ」

と手を振つて首を縮めながら、尙幾分自分の面目を繕ふやうに聲を低めて、  
 「お身達はお知りやるまいが、狩場旅館の警戒風の俣ぶ隙だもない。殊に祐經殿は大將軍お座近う在するぢやに、粗略に覘は、淵に飛ぶも同じぢや。……お身の爲ぢや。この度は思ひ止まらせ。叶はぬ望みに身を捨つるは、智者のせぬ振舞ぢや」

と小賢しく唇を嘗めた。十郎は「失策つた」と悔んだが色にも出さずなく強ひて笑つた。

「アハ、ハ、ハ、誰も彼も然か申さる、いまのは戯れぢや。お身の心を試さう爲ぢや。……痩せ枯れの野末の草、寄る邊ない我等が、何しに鎌倉殿お狩屋なぞ覘はれようか」

「云はる、通りぢや。無謀な事ども呉々も思ひ止まられたが宜い」

互に表面は白齒を見せたが、氣拙くなつた床机の端に、何時まで在るべき要もない。

「お雑作に相成つた。又こそお目にかゝり申す」

十郎は懇ろに挨拶して、駒の手綱を解きかけたが、一徹な五郎は與一を尻目にかけて、押黙つて後を見せた。

「五郎殿、狩野へ行かせらる、か」

聲をかけた與一の眞額を回顧りさまくわつと睨んだ五郎は、荒々しく氣色ばんだ。

「それ訊ねて、何とする」



「ヤ、これは奇怪な。……五郎殿、血迷はれたか」

與一も退かれず佩刀に手をかけた。

「過言ぞ。不肖ながら曾我五郎時致、お身如き腰ぬけ武士を對手にして血迷はるか」

「重ねぐの無禮。大それた企てに味方せぬとて、その舌叩くか」

「アハ、ハ、ハ。お身などを頼うだとして、足手纏ひぢや」

存分に嘲り笑はれて、刀にかけだ與一の手はわななくと搖れた。

「五郎、観念せ」

「美事、斬るか」

「應さ。この太刀伊遠に佩かぬ」

「殊勝な口上、さらば對手する」

「いざ」

ざり、と寄る若い同士、打捨て置いたら、所詮は血を見て済むまじき氣勢に十郎はつと這入つて押隔てた。

「侍ちやれ。五郎控へい」

荒立つて他へ洩れたら之れこそ大事、この場は圓く納めねばと眼色で知らすと、五郎も軽く背いて身を退いた。

十郎は取なすやうに

「與一殿、悪う思召されな。由緒に甘へての御無禮ぢや」

と弟に代つて詫を述べた。與一は元より好まぬ事、且は五郎の小手の冴えた聞知つて居るだけに、好い機會にして機嫌を直した。

「偶々の御入來に端たない振舞致した。この儘さらりと水に流され」

さらばと兄弟は鞍にのほつて三浦與一の館を出た。——一旦の怒を抑へた五郎の無念さは消すべくもない。

「兄上、無念の事致した。……大事を明したからには捨置かれぬ與一、お止めなされずば二つにして呉れうと存じたに……」

「尤もな儀ぢや。なれど今其許が與一を討果したとの意趣世に聞えたら、却つて祐經が固めを厳しく仕居らうかと思つて」

「彼奴、女々しい與一、他へ洩らす事でも御座るまいか」

「真逆に……彼も武士の端くれ、殊には繋がる縁ぢや。味方には参らずとも、邪魔立ては致すまい」

「然うあらば、重疊ぢやが」

五郎は尙も俯に落ちぬらしく口を噤んで、若葉そよ吹く夕の風に駒を急がせ

た。果然、與一は兄弟の後姿を見送ると直ちに、厩に馳せて栗毛の逸物を曳出した。した。

「忌々しい時致、思ひ知らせて呉れうわ」

十三

彼は鎌倉へ内訴を企てた。

三浦與一は己が腑甲斐なさを思はず、却つて五郎時致の正しき心を憎んで卑怯にも鎌倉へ内訴の覺悟を極めたのであつた。

「やがて吠面搔かせて呉れうわ」

駒を煽つて一目散に鞭を上げた。がその時すでに兄弟は一里あまり先を打たせて居た。

帯の如くうねれる一路。相隔たりて駒歩まする兄弟と與一の心は雪と墨程の相違であつた。先なるは父の仇を討たんが爲に袖も干ぬ間の涙の花、又後なるは女々しき私憤に裏切して、蕾のまゝに梢を折らう企みであつた。若しこの儘に刻過ぎて、與一の駒を遮るものなく鎌倉幕府へ驅け込んだら什麼なるであらう。無慘や兄弟は裾野の露に濡れもせて、世を狭めたる漂泊の涯を仇の爲に酷まれねばならぬ。

掌に置かれし卵、累うさは例へやうもない。——とも知らず、兄弟は小坪の坂に差蒐ると、彼方から従者引具して和田義盛と畠山次郎重忠が登つて來るに出逢ふたので、兄弟は駒から降りて懇ろに挨拶した。

『これは、各れへ成らせられます』

『久しい狩の塵を洗ひに湧き湯へ參る。お身達も行かれぬか』

重忠も親戚の間柄、手綱を控へて聲をかけた。

『忝なう御座りまするが、ちと思ひ立ちたる事ども御座りまするで』

『生憎ぢや喃。富士野の狩へは參らるゝか』

『は、是非にお供』

『三原野とは優れて宜い獲物もあらうに、構へて失策られな』

『お力添を願ひまする』

『さらば、裾野で逢はう』

『お別れ致しまする』

兄弟は馬を曳いて行き過ぎた。義盛も重忠も、日頃から工藤祐經の佞奸を快からず憎んで居るのみか、薄々兄弟の心事を察して居るので、優しい眼で見送つた。

『早う本懐遂げさせて遣りたいものぢや』

『曾我の母にも反いて一存貫かう爲の苦心と聞く。悼はしいものぢやに』

兎角して義盛重忠の一行が鎧摺峠へ差か、つた頃は、風はありつ、僅かに汗を覺ゆる程の日和であつた。一行は峠の頂に休息した。義盛と重忠は樹の株に腰を卸して用意の酒なぞ慰めに汲み合ふて居ると、従者の群が『あれく』と指さす方に、誰やら一騎。駒を煽つて驅せ上つて来る。

十四

義盛は酒器を手にした儘、聲する方を望み見て

『はて、見たやうな』

と眉を擡めた。重忠も稍々に近づく馬上の士を見てあつたが

『與一ぢや』

と呟いて小首を捻つた。

『慌たしい何事ぢやろ』

『供も連れいで……』

云ふ間に與一は近づいた。遮二無に路を急いだので、額を流る、玉の汗が息苦しげに顎へ傳はる。

『與一殿、何處へわせらる、』

先づ義盛が聲をかけた。

『これは左衛門尉殿、畠山殿も連立たせて、各位こそ何處へ』

恚う云ふ間も心急くと云ふ風情で、鞍の上から挨拶した。

『入湯に參る。して貴殿何とやら慌だしけな。變事ども在してか』

「否。然は御座らぬが」

と言葉を濁らせて

「俄かに鎌倉まで」

「將軍への御用か。何のやうな儀で……の」

「ちと密かに言上致したい儀の御座つてぢや。……日脚に遅れては難儀、御

免……」

ゆらりと手綱を捌かうとする態度に、重忠は先刻曾我兄弟に逢ふた事を思ひ出して、扱はと獨り肯いた。

「お待ちやれ、與一殿」

ずいと起つて與一が駒の鼻面に大手を擴けた。

「あいや。畠山殿。何しに途を塞ぎ召さる」

「貴殿を救はう爲に」

「何と云はる、」

「この儘通さば貴殿一命は風の前の燈火ぢや」

「ヤ、ッ」

「貴殿、胸に覺えがあらう。……われ等この先で曾我の殿原に逢ふたぢや」

重忠がかけたる良におぞくも懸つた與一の顔色は逆と變つた。

「彼奴等、その砌何ぞ貴殿に申し居りましたか」

「云ふたとも、云はぬともそれは扱措き……與一殿、鎌倉へ何の内訴あつて急がる、ぢや」

落つき拂つた重忠はちり、くと前へ進む、與一は早くもそれと察した。——兄弟が途中で待伏せして居るに相違ない。——浮と峠を降られぬぞと、わが身

の暗い心から杞憂を抱いたが、唾せぬばかりに辱められた無念はこの場になつても忘れ兼ねる。

『まこととは、彼奴等首にせう爲に』

十五

自 鶴

『奇怪な事……』

鎌倉切つての剛勇、鶴越の逆落しに愛馬を背負ふて降つたほどの重忠に遮られて、與一は一步も進む事は出来なかつた。——悲しげに嘶く駒の聲のまに／＼咲き遅れたる山櫻の花がちらほらと散りかゝる。

『與一殿……貴殿如何なる怨あつて、便なき兄弟に憂き目見さするが、確と承はらう』

次第によらば赦さじと揺りあける太刀風三寸。活かすも殺すも重忠が心のまま、屹と見上げた一文字の朱の唇は凄まじく引結ばれた。

『久しい怨とて有らう筈はない。只先きの程打連れて訪ね参つての砌、裾野の狩に思ひ立つ事あれば味方せよと申したちやが、所詮は叶はぬ望み、荐つて無謀を申聞けたに五郎奴舌動くまゝの雑言……一旦は聞き流したなれど、何としても胸が晴れぬで、只今より鎌倉へ出仕、上のお聞きに入れて兄弟の首刎ねさせう爲に急ぎ参つたで御座る。……この様の仕誼、貴殿には關係のない儀、お通し下されい』

語るもの、聞くもの、いづれも兄弟とは一族一黨。——關係のないとは云はさぬ。——重忠が轡を押へた腕は殊更に力を加へた。  
『與一殿、それ本心でか』

『不肖ながら拙者も三浦與一、心にない事は申さぬ』

『それが武士の本懐か』

『ヤ、それは』

『見さけ果てた御仁ぢや。……それ聞いた上は、この峠むざとは越させぬ。達とあらばわれ等兄弟に代つて對手する』

轉を離した右の手は刀の束へ。——先刻にから肩を擧めて聞いて居た和田義盛は重忠をなだめ、與一を見上げて聲を勵ました。

『下馬せ。ゆるりと我等申す事聞かれい』

蛇に規はれた蛙、しほくと鞍から降りた與一の顔には、明さまに羞耻の色が動いた。

『與一殿、扱てくお身は無惨な事思ひ立たれたの』

重忠は慄れむ如く泌々と云ひかけた。

『彼等兄弟の企て、叶はぬまでが見上げたもの。……その大事打明けてお身を頼うだは、數ある一族のうちに頼母しう思ふての末ぢや。その心根汲んだなら血氣もの、五郎が雑言なぞ楯に、女々しい内訴なぞせられぬものぢや。……お身内訴によつて兄弟の首刎ねられたら、世の人は何と云はう、兄弟をこそ不慙と申せお身を道理と見るもの只のひとりも在さうか』

與一の顔からは血の色が薄れた。

十六

『打もの取つては人に後れぬ與一殿とも知られながら、これしきの情辨へもななく、後世の嘲りを招かる、内訴なぞとは、弓矢とる武士として有るまじき儀ぢ』

や。……兄弟が無禮はわれ等代つて詫び入るで、ふつと思ひ止まられい』

締めつ、緩めつ、重忠の説く傍から義盛も言葉を添へた。

『與一殿一旦の怒り心迷ふた迄ちや。この場からわれ等と共に湯浴みに御座れ』

『拙者一生の不覺、面目も御座らぬ儀……』

『内訴を思ひ止まらするか』

『この上は兄弟に詫せねば濟まぬ』

『宜くぞ心を翻された。われ等共に欣ばしう覺ゆる』

『あ、危うい瀬戸で御座つた。若しこの峠でお目にかゝらねば、末代に悪名を残す處』

『誠にな。……これとて天が彼等兄弟を憐れませての引合せぢや』

心解けたる三人が、この時初めて武者髭をゆるがして笑ひ顔を見合せた。里

には絶えし鶯が峽に老いて、若葉にまじる花の香に眠たい風が動く。空には雲が流れて、山の相模の遠方に碧の海が汎く見ゆる。

『彼の五郎と云ふ和郎、強かなてんかう御座るな。この與一なぞ眼の隅へも置かぬ物腰、稀代な膽ぢや』

酒二三杯、ほろりと酔ふた三浦與一は繰返して五郎の振舞を物語つた。

『然ればぢや。われ等先頃大磯の鶴菊が許に酒宴した時も、彼の血走つた怖ろしい眼を見申したが、何として彼の面構へ、腕を恃んで存分に振舞ふところは三國一ぢや』

義盛は呵々と笑つた。

『朝比奈殿と組ませたりや見物ぢやろ』

重忠は興あり氣に盃を義盛にさした。



「卑下でない。三郎ども到底も彼の敵でない。ずんと強いわ」

「それ程の力、無駄に捨てさせたうないものぢや、……喃、與一殿。いづれ狩場で兄弟にも逢はれうに、密かに心添して遣はされ」

「心得申した。馬なりと、弓矢なりと、われ等寸志を届け申す」

三人は酒器を収めて躑躅花咲く峠を降つた。

### ■名残の巻

一

過ぎし峠に焦うした浮沈のあつたとも露知らぬ兄弟は、鞍壺に薄れゆく日を惜みながら、聽て由比が濱に着いた。

松毬拾ふ童も去んで、夢のやうに暮れてゆく渚の静けさに駒を降りると、黙として淨らかな砂の上に腰を卸した。いつしか宵の月が上つて、さらりとさゝれ小石の磯に浸みる春の潮が、心なげに仄めきながら浅い夜の色を展べて来る。

ちらりと珊瑚を鏤めたやうな春の夜の燈は稻村ヶ崎あたりであらう。忍ぶ

やうに遠くから聞えて来る暮夜の鐘は、海土が逢瀬の戀知り顔に思はせ振である。——兄弟はじつと打黙して、例へなき寂しさを味はうた。——富士の裾野の狩倉に打立つべき決心を極めた身には、總て浮世の執着はない筈である。戀も涙もない筈でありながら、夜を子鴉の啼くにさへさしぐまる、日蔭の身には散りゆくなべの心惑ひがあつたのである。

「喃、時致殿。……狩へ首途の装束ども用意せざるまいが」

「然れば御座る。所詮は狩屋に骸を曝すべき我等が、褪せたる小袖ども身につけたら、落魄の身の世を狭めて物狂ほしう仇討を思ひ立つたなぞ、嘲られまいものでもお座りませぬ」

「生じひの親戚ども頼つて、世上の沙汰蒙るも心外で喃」

「早川の土肥殿へ無心致しませうわ」

「それも妙ぢや。……が兄弟打揃ふて無心もなるまい。俺は虎の手をかりて灌いで貰はう。見苦しからぬ程ならば之れにて宜いに」

月は刻々に高くなつて、海面は明るうなつた。巖の蔭に寝もやらぬ白禽の聲が掠れて、寂しさは深うなつた。——曾我の父、曾我の母、身にかへて慈悲の小袖を賜もるべき親々はありながら、打明けてそれと云はれぬ大望に押かくして不興を蒙る現在の境遇では、勇んで館へ歸る事もならぬ。

母やいかに。

花にそむきて遠く去ぬ雁を仰ぎつ、兄弟はやがて其處を出で立ち、稻瀬川も打越えて稻村ヶ崎七里ヶ濱をも打ち越えた。

大磯へ着くと五郎は兄に別れて早川の土肥の館へ向ひ、十郎は虎が許へ入つた。こゝら邊りもこの度の狩へ参する人々の噂に賑はひ、弓師、伯樂など騒ぎめく輩を連れて酒宴をする華やかな殿原の群が、館々に充ち溢れて居た。そのなかに雑つて、十郎は只ひとり別けて淋しい心持で虎が居室に膝を組んで居た。

書湯あがりの梳き髪を紙に包んで鏡に向ふた美しい虎のうしろに、帯も床しの沈丁花が花筒に匂ふて居る。常は胡弓の音を愛づる十郎も、何とやら思ひ詰めたる風情で、虎が化粧の果つるのを待つた。

「何と、曾我へ行て見る心はないか」

「譯も告げずには、笑む郎君を艶めかしう見上げて」

「懐かしい郎が住み侘び在するところ、その夢のふる郷を一目なりとも見て置

きたう思ひまする」

「それ程に思ふなりや、明日にも召連れうか」

「嬉しや、それ眞實か」

「兩人の仲に、嘗て露更偽りとははない。眞實ぢや」

「して、母御前にもお引合せ給もりまするか」

「それはならぬ。……なれど、ふたりが膝を容る、住居はある」

「そこに妾を召連れ下さりまするか」

「垣間見る人もない明暮。浮世の花には疎いなれど、心置きなう在る程には却

つて便よい隠れ家ぢや」

「その隠れ家へ召さする御用、品變つた事ども在しまするか」

「外でもない。近う鎌倉殿富士の裾野を狩らせらるゝに於て、われ等も餘所な

がらお供申さうと思ひ立つたちやが、知つての通り寄邊なき身の晴れの衣装とてはない。古びたれど肌馴れし小袖直垂、其許に洗ひ淨めて貰はうと思ふてぢや。……當惑ではあらうなれど』

『何のく。郎の身にそふ小袖の針、冥加と思ふて縫ひまする』

『行て給もるか』

『願ふてもなき嬉しい事で御座りまする。今宵にもお供致しまする』

それと極ると、虎は館の父母に乞ふて四五日が程の暇を貰ふた。

三

虎御前の父母は、快く娘の乞ひを許した。白拍子とは云ひながら夢賣る家の卑しさとは品違ふ長者が愛娘、心染まねば酌取らぬほどの見識も面目も、戀に

は盲目の哀れをこめて、翌くるを待つて十郎と共に大磯を立ち出でた。

大磯から曾我までは妙なからぬ道程である。歩み習はぬ女の足では及びもつかぬで、鞍に危うく縋りながらも、口取りの奴を供に、僅かばかりの葛籠を土産に十郎と押並んで、人目憚かる裏道傳ひに静かに駒を歩ませた。

たま／＼の廣き天地——日頃は垂籠めてのみ待つ宵のねがひをかけて、蜘蛛の軒端がくれに仰ぎ見し山の影さへ、今は籠の末遠く眺められる。

『彼處は誰殿が館ぞ。こなたに白き花の雲は何々の社の森ちや』

十郎が指さし教ふる途すがらの右に左に、虎は嬉しう心をはづませ乍ら胸開くやうな長閑さに酔ふた。野の梅は既に若葉の緑淺く、丘をめぐるに蓬摘む童の唄さへ聞えて、實に戀ゆる女の女ご、ろは、翹を伸す小禽のやうに自由に平かであつた。

野を急ぎ、渚を傳ひ、いく度か、茶に憩ひつ、應て曾我の莊に近づいた。

「霞隔て、一際高う見ゆる、あれが館の目標の椎の樹ぢや」

「時致殿と椎の實を拾はせられたと承はりし幼な語りは、彼の樹蔭で御座りまするか」

「いかにも。又、前途を流る、川か、こでは魚掬ふとて裾濡らして、乳母の讚岐に吐られたぢや」

「ほんに。何かと懐かしいこゝら邊り。一生の幸福には、妾も曾我の女と呼ばれたう御座りまする」

「愛い事を云やる。……望みの叶ふ刻をお待ちやれ」

虎御前が埒もなく欣ば欣ばほど、十郎の心は辛かつた。死出の衣裳を縫はする爲と打明けられぬ切なきを凝と堪へて、一先づ虎御前を知己の許に憩はせ、

館に戻つて兩親への挨拶を済ませて後、密かに自分の居室に誘ひ入れた。

「時致殿は在されませぬか」

「早川の土肥が許へ參つたで、やがて戻らう。心置きはない、悠りと居やれ」

虎御前は見ると聞くと毎事に嬉しかつた。十郎が端近う召使ふ館の僕には懇ろな土産を取らせ、月に静けき風呂汲ませて旅の疲れを洗ひ流した。

四

蓬の月に風も吹かず、うつらうつらと更けゆく莊の障子に籠つて、十郎と虎御前とは嬉しい一夜の物語りに笑み交した。

「妾のこゝにあるは、母御前にはお知らせ御座りませいでか」

紫紺摺りの直垂を解きながら、鉄の鈴を膝に鳴らして、虎御前は灯影に白い

顔をあげた。

「お知りやれまいが……何しに改まつて此の様な事訊きやる」

「晴れて對面のならぬが寂しうて」

「ハ、ハ、ハ。埒もない。晴れて名乗らずとも祐成が妻なりや、母御前が爲には嫁女、心にかくる程もないわ」

「ほんに左様で御座りまするな」

唇を洩る齒ならびは珠と白けて、欣びに輝く瞳には艶めく春の夜の灯が滲むやうに美しかつた。——虎御前が小指の先に糸を曳きつ、圓らかな膝の上にぱらりと直垂を解きゆくなべに、十郎は世にも嬉しき心地して、丈に餘る愛ぐしき女の黒髪を指にからんで弄ぐつて居た。——烏羽繪の筆も及ぶまじき忍ぶ夜の戀。——外面には青麥撫ぜるそよ風が通ひ初めて、連翹の伸びたる花が

障子の端に影をつくる。

「そのやうに急がずとも、先づ憩みやれ」

「些しも辛い事御座りませぬ」

「馴れぬ旅ぢや。疲れつらう」

「それとて忘れて居りまする。只この胸にお情が滲々と脈打ちまする」

雀も孕む巢かけの技に、龜鳴く村の夜のいろは漸次に濃くなつた。虎御前は一心に鉄の鈴を鳴らして居る。——その眞實を傍でみる十郎の心には、例へやうなき不感さが加はつて來た。——やがて小袖直垂縫ひ上げたら、それを最後に別れねばならぬ。とも知らず心いさみの虎御前が、われ等が裾野の露と消えたと聞いたたら、そも奈何ばかり嘆き悲しむ事であらう。——と思ふて我にもあらず、ほろりと涙を膝に拭いた。

「郎！、何しにお泣きなされまする」

虎御前はあなやとばかり驚いて、膝に絡る、絹押のけて縋り寄つた。

「御意に適はぬ節あらば仰せ聞けて下さりませ。……要なき人の讒言なぞお氣に支へられてか」

泣かぬばかりに愁はしくすほめた肩を抱き寄せた十郎の胸は浪うつ如く高まつた。

「そのやうな事ではない。其方の親切を思ふにつけても、慰むる術でもない甲斐ない境遇が嘆かれてぢや」

五

隠すとすれば穂に出づる芒の思ひ、包まんとする十郎が心の切なさは、却つ

て虎御前の憂ひを深ふせしめた。強請まる、儘に兎や角と云ひ紛らしたが、いづかな諾ふ風情もないので、遂に眞實を打明けた。——虎御前は、今の先まで心樂しく女房振りに裁ち縫ふて居たに引かへ、身を慄はして泣き沈んだ。

「さすれば、富士の裾野にわたらせらるゝを限り、お戻らせは御座りませぬかや」

「仇を討てば殊更、途中支へらるゝ迄が、右府將軍の陣屋に忍ぶわれ等。……萬に一つも身を完ふする事はならぬ」

「どうあつてもお命を捨てさせられまするか」

「身を捨てねば望みは遂げられぬ」

「その大望、暫しが程お延ばしはなりませんか」

「風吹けば花は散る。春に遅れてわれ等胸の晴るゝ機はない。是非にこの度本

望を遂げねば措かぬ』

『あ、扱も詮ない儀、郎の亡きあと、何しに要なき身を永らへませうや。…一層お手にかけさせられ、この悲しみを断たせられ…あるにも在られず嘆き侘ぶる可愛ゆき女性と抱き合ふて十郎の心は千々に亂れた。』

『何しに、其許が雪の頸に無惨の太刀ども當てられうぞ』

『さらば、妾が臨終の唇に、せめてはお涙ども注がせられて…』

『ヤ、不吉な。…臨終なぞと』

『この遺瀨なき憂ひの絲を、ふつ、りと断ち切りまする』

つと身を起して、十郎が脇差に手をかけると

『待ちやれ。其許身儘に生害したら、兼ての約束反古ぢやぞよ』

『反古とは…エ』

『一蓮托生、未來の誓ひを希ふなりや、われ等が爲に後世を吊ふて呉りやれ。』

…其許此處な館に果たりや、世上の沙汰は何となる。御父の仇討つべき孝道が暗うなる』

『…死ぬ事もなりませぬか』

『ならぬ。われ等亡き後、誰が香花手向けて呉れうか、…時致にも話しある。』

専念に其許に頼み置くらや』

『辛い事で御座ります。悲しい事で御座りまする』

盡きぬは涙に夜はいたく更けた。

六



泣けばとて、嘆けばとて、逢ひたるものは別れねばならぬ運命。それは未だ  
しものこの別れ遂に永劫の嘆きの夢の隔たりを思ひ出とせねばならぬ。

虎御前は覺悟を極めた。——死ぬにも増る悲しさに瘦せながら、せめては一  
刻千秋のお傍にあるを心やりに泣くく、直垂小袖の濯ぎを終り、四五日が程に  
新らしう縫ひ疊んだ。大磯からは朝に夕に迎ひのものが父母の便りを傳へた。  
兄弟が母御前も、臙氣にそれと察しつ、も咎め立てもせなかつた。明朝は大磯  
へ戻らねばならぬと云ふ前後、十郎と虎御前とは曉の鶏の啼くまで盡きぬ名  
残を枕に惜んだ。

ほのくくと明けゆく春の曙ながら、兩人の胸には秋霜の置きまさる心地で  
あつた。虎御前は綾の小袖を脱いで十郎の前に差置いた。

「永きお別れ、妾が遺品ともお召し下さりませ。嬉しうお傍にありける程の

佛も、伽羅の香とともに薄る、が悲しう覺えまする」

十郎も亦自らの肌着を脱いで虎御前に着せた。

「寒くば肌、風暖かき閨の衣桁にかけ靡けたこれなる小袖、祐成が亡き名を  
留めて一遍の念佛唱名頼み置ぞよ」

手を取り合ふて泣き沈むうちに、菜花の風に曉六つの鐘が聞えて、老いゆく  
春の曾我の莊に色鳥が囀つり交つた。人に見られて恥かしの忍ぶ戀路、いざと  
ばかりに立出でた十郎と虎御前とは、駒の轡を押並べて山彦山の峠まで差か、  
つた。——戻れば曾我、進めば中村、その中間なる峠の麗に男女は悄然と駒を  
停めた。

『いづくまでも名残は盡きぬ。さらばぞ』

十郎は腸を断つ悲しみを凝と堪へて駒を歸さうとした。

『喃……待たせられ。……又逢ひ難き永きお別れに、いま暫し』

と鞍壺に身を伏して泣く。十郎も眼に一ぱいの涙を貯めて、言葉もなく差俯向いた。

『さりとは分別のない。人に見られて笑はれまいぞ』

心を鬼に吐りながら、さらばくと引返す駒の歩みに、散りゆく花の涙をこめて、半町がほどは相隔たつた。

『オ、ーイ』

消え入るやうな聲に追はれて回顧ると、虎御前は堪り兼ねてか再び駒を引返して来た。

七

別れては立戻り、立別れては又呼び戻す。斯くして遂に見えずなりたる二人の影は、この世に於て逢ひがたき涙の雨に隔てられて了つた。——十郎が館に戻つて見ると五郎が戻つて居た。——五郎は早川の叔母婿(土肥彌太郎遠平)の許を訪ねて狩装束を乞ひ受け、引とめらる、儘に四五日が程滞在して、この日戻つて来たのであつた。十郎は虎御前が事を落もなく語り告げたが、五郎は何とも答へなかつた。たまぐに戻り来りし曾我の館の春も名残り。——幼なき昔の思ひ出も今を限りと眺めやる庭面の樹々に綿々として涙が湧く。五郎はやをら膝を進めた。

『いかに兄上。……この度の狩の首途、萬に一つも生きて還らう望みは御座らぬ。斯くて母上の御怒も釋かず、ひと度も笑顔を仰ぐ事なしに地下に赴くこと如何にも心外で御座ります。……御父の爲にのみ仇は討つとも、母上への不』

幸とあつては心残り。……兄上より、托けて母上に御赦免の儀をお願い下さりませ』

と思ひ詰めて頼み入つた。十郎は實に尤もと肯きながら

『さらば、押して願ふて見ようぞ。共に來やれ』

と連立つて母の居室へ伺候した。五郎は襖の外に膝を折つて首尾や如何にと案じて居た。十郎は居室に進み入つて懇ろにその後の起居を訪ね、富士の裾野の狩に参りたき一存を述べて、五郎の赦免を乞ふた。

母御前は俄かに氣色を變へて

『五郎とやら、時致とやら、そのやうな子を持つた覚えはないに』

と空嘯いた。十郎は此處ぞとばかり絶るやうに

『すりや、箱王の昔、お忘れ御座りまするか』

『箱王なりや箱根の坊へ捨てた子ぢや。今更に子とは思はぬ』

『捨てた子との仰せ、御慈悲なう承はりまする。若しその箱王聞いたなりや

奈何ばかり嘆き申さうか』

十郎は我から涙を呑みくだして凝と母の顔を見た。

八

いかなれば斯くも素氣なく振舞ふのであらう。母と呼び、子と名乗る淺からぬ縁を餘所に、飽迄も義理ある父(曾我殿)の前を憚かつて、何時までも心強くせらる、事が十郎には心外に堪へなかつた。襖を隔て、蔭に聞く五郎の胸は張り裂くばかりである。十郎は屹と思案して

『斯くばかりお詫致しましても、五郎御跡免の儀は叶ひませぬか』

「云やるな。そのやうな事聞きともない」

「然らば達てとは願ひませぬ。……この上は、拙者も時致諸共七生までも御勘當なされませ」

「何と云やる。其方には咎もないに」

「仰せとは御座れど、五郎とて、拙者とて、河津殿が世に遺されし只ふた本の若木の苗、その一本を箱根の坊へ移さる、は何より辛う御座りました。五郎とて同じ心、世に頼りなき病弱な兄の身を案じて、末長く力を協さう下心から御意に逆ふて下山致したで御座ります。……罪あらば兄弟が罪、五郎にのみお咎めあらせらる、事、祐成が身にとりては此上なきお怒みと存じます。所詮はわれ等あればこそ母上にお悩みもかけます。曾我殿御心も煩はせまする……一層われ等を捨てさせられ。……いつの世までも河津殿御子として、われ

等意趣は立てます。……喃、母上」

脇を絞る十郎の言句は手に取るやうに五郎が膽に轟と應へた。

「兄上、忝なう御座る。それ程までに思し召し下さるか。……さりとは母上の情の剛さよ」

聲も立て得ずはふり落つる涙を抑へて居るとも知らず、有繫に母は心惹かれて十郎を慰めた。

「悲しい事を聞くものぢや。無雑作に勘當なぞ成るほどなら、日頃心を痛めはせぬ。……凡そいづくの世のはてに、父ばかりの子があらうぞ。母のない子と云ふが有らうか、……この母に捨てよと強請む其方は、父ばかりの子とならう心かや」

「是非も御座りませぬ」

「エ、餘りと云へば本意ない沙汰喃。そのやうな事あつては河津殿お位牌に濟みませぬ。母の身が立ちませぬ」

「さすれば、何時までも拙者を捨てさせられませぬか」

「もとよりぢや」

「子と思召し下さりまするか」

「あい。……喃」

「その捨てがたき祐成が爲には天にも地にも替へがたき弟、取も直さず母上お子では御座りませぬか」

九

母御前は遂に我を折つた。

もとより憎からう筈のないわが子、雨にも風にも思ひ出さぬ日とてはないに。

「それ程に弟が上を心にかくる其方が眞實、母も嬉しう思ひまする。……使なくせしも浮世の義理、一圖に母を怨んでばし給もるなや」

「存難き御言葉、何としてお怨みなぞ申しませうぞ。……されば五郎お赦免下さりまするで御座りまするな」

「お、赦さいで何とせう。……張りつめた意地も張も、恩愛の絆には克たれぬ。……改めて、男となつた殿振を見たう思ひまする」

「それ承はつてこの胸も晴れました」

「して、その五郎は何處に居やる」

「お次に控へさせて御座る」

「次に……とな」

そいろ心に膝を浮べて

「それく、早う呼び入れたが宜い」

と母は女性の脆きにかへつて、箱王の昔を今に大人びたるわが子の姿に憧れの胸を騒がせた。——十郎は突と立つて襖を開けると、そこに五郎は兩手を支いて涙に暮れて居た。

「母上御情聞かれたか、お赦免なされたぞ」

「忝う御座りまする」

「母上も待たせられる。……對面せうとの御意ぢや。ちやつと入りやれ」

涙を拭いてにじり入る一室のうち、幾年の昔より打絶えて對面せざりし懐かしの生みの母が、これも涙の眼を瞬いて凝と此方を見詰めて居る。

「母上！」

「お、箱王か」

「お久しう御座りまする」

「箱根の坊へ去ぬ時に別れた儘ぢや喃」

「仰せに反きましたる罪、お宥し下さりませ」

「それは過ぎたる悲しい夢と忘れよう。……兄と違ふて、頼母しうも健やかさうな」

「寄る邊なき漂泊にも、只の一度も病み臥した事御座りませぬ」

「それは何より、……祐成殿は見らる、通り繊弱い質、この度の狩にも其方連立つて何かと力を添へたが宜い。母は無情う在ながらも、兄弟が睦まじさを陰ながら心強う欣んで居りましたぞ」

互に擦り寄る三つの膝が、今は巴に離れ難なう見えた。

十

見るも涙 聞くも涙

隔ての垣の打解けて泣き欣ぶ母子の心を押はかつて、召使ひの奴婢までが貰ひ泣きの袖を絞つた。何とやら、さしぐむやうな老春の空からいとくと暖かい雨が降り初めた。央は開けたる小窓の外の柳のしづれを、忙しなげに嘯りながらすい〜と燕が掠める。――母子は靜かに鼎座した儘、互みに過ぎし昔の事を打語らうて居た。

「やれ〜。このやうに心の晴れた日とてはない。……慙くある上は、曾我殿へは母から取なして進ぜう程に喃、當分は何處へも去にやるな、や。……思へ

ば母が其方達をつれて此處の館へ移つたはふた昔の夢、その頃の一萬も箱王も父戀しとて幾度母を泣かせた事やら」

そつと涙を袖に拭きつ、聞く人もない眞身の話に、母は俄かに自髪の殖えまさるやうな思ひがした。

「……彼を見やれ。燕は去年の古巢を戀して、同じ軒端を忘れずに通つて來やる。幼ない夢に乳房を探つた母の懐遠く離れて……宜う立派な殿原となつて給もつた。いま目前に成人の欣びを見るにつけても、母甲斐のない身が恥かしうて」

愚痴も口説も、老いゆく母の淋しさと察して、十郎も五郎も差俯いた儘涙を啜つた。

「よしや日蔭に伸びたる花とて、曾我殿が子とあるからは鎌倉殿お憎しみの薄

る、時もあらう。廣き世に身を立て、こそ、亡き河津殿への孝養。……その心して狩の御供も濟んだなら、ぢつきに戻つて来て給もれ。……喃」  
燕を羨む母の心。——そのいとほしさを思ふにつけても、死に、行く身の立歸るべき日を約する事もならぬ。

「狩へは何日立たるゝな」

「刻遅れぬうちと存じ、明日にも」

「然りとは心忙しい儀ぢや、二三日が猶豫はなりませぬか」

「折角では御座りますれど……」

「時致殿とは滲々と打語らふ機會とてもなかつたに。……本意ない事喃」

その嘆き母ばかりかは。今宵かぎりの別れと思へば、永劫に夜すがら語り明かすべき和樂はない。

「數々の有難きお言葉、肝にこたへて嬉しう御座りまする」

五郎は血を吐く思ひで疊に額を擦りつけた。

十一

雨はいつしか夕寂れて、笹揺れの軒の高きに雅びな燈籠が灯される頃となつた。——兄弟は明日の首途の用意もせねばならぬので、母御前の許を退らねばならなかつたが、兼て心に思ひ極めし最後の望みとして、十郎は先づ母御前に晴の小袖を所望した。

「諸方の殿原打集ふなかに、餘りと申せば褪せたる小袖身につくるも佗しう覺えまするで、お情には程よき小袖をお貸し下さりませ」

「お、その小袖の綾の寂びやう。……然りとは、誰が手に濯いでか、垢つい



「ても見えぬ」

「さる人の手に解き濯いでは買ひましたなれど……」

「今更虎御前とありし前宵の名残を思ひ泛べて、寂しさを堪へながら」

「只、母上お手づからお貸し下さりませ」

と頼み入つた。母御前は連銭つきたる淺黄の小袖と、白唐綾の小袖と二襲ね取出して兄弟が前に置いた。

「これは曾我殿が知らせ給へる品ぢやほどに、狩果てたなりや戻して給もれ。

……一存に遣はしたとお咎ともあらば詮ないで喃……淺黄なは祐成どのへ、

白綾なは時致どのへ」

「忝なう、お借り致しまする」

押戴いて次へ下ると、兄弟は身につけた古小袖を脱ぎ疊み母御前の目通りへ

差出して

「花の雨にも若葉の風にも、打たれつる流離の遺品……」

「遺品……とな」

「……狩倉の流れ箭ども圖られませぬ兄弟が身の空。……立歸る日まで御手許

にお留置かせ下さりませ」

定かに云はぬ別れの意を押し退出しようとすると、蟲が知らずか母御前は端近う送り出して、種々の優しい言葉に兄弟の腸を絞つた。

「これにてお暇いたしまする」

「明日はお目通りいたしません」

「お健やかに在りませ」

「百年のお榮祈りまする」

右左から名残を惜んで、顧み勝に靜に室に戻ると、祐成も時致も、ほつと重荷を卸したやうな心易さを感じると同時に、事新らしく母の情を胸に泣いた。

『これにて我等年來の胸が晴申した』

『母上は、これなる小袖を戻せとの御意あつたが、生きて再び曾我山を見る事叶はぬ我等とは知し召さぬやら』

兄弟は暫らく灯をか、けて、寂しい境遇を語りつゝけた。

十二

五郎時致は初めて廣き天地に生れ來た甲斐あるやうに覺えた。——佛だにも知らで別れし父戀しさを知り初む頃には、兄諸共に第二の父の前を憚り、篠竹の矢を風に鳴らして仇討つ術を習はうと思立つと間もなく、只ひとり僧にな

れとて箱根の坊へ送られた。思はぬ夢を嘆く間に過ぎぬる月日、落飾の鐘を嫌ふて曾我の里へ驅せ戻つてから一千幾日、母の怒りの解けぬまに、西へ東へ一族を頼つて漂泊の旅にくゞりし門松も男さかりとなつた今、而も決死の仇討の首途の前夜に、思ひ設けぬ母の許しに身に餘る慈悲の涙を浴びようとは。十郎は既に最愛の虎御前とも別れ、何の思ひ残す處もない。五郎とても他に愛着のあらう筈なく、心の底から母の赦免を身の果報ぞと打欣んだ。

『いかに時致殿、われ等亡き後の遺品とも御覽せらるべき母上へ、只一筆書き残すまいか』

『さらば、先づ兄上より認められませ』

十郎は文箱を引寄せて香はしき墨擦り流した。取り上ぐる筆の穂先に堪へがたき悲しみは薄く亂れて、溢り難なる文字ずりに涙が宿る。

『いかばかり薄き縁に候ひけむ。この世にありし春秋の御孝養も心に任せず却つて御惱みのみかけ奉りし事忘れ申さず、後世に逢ひまつりてこそお詫も致すべけれ』

こまぐくと捲きこめて筆を措けば、五郎も直ちに書きついで手箱へ納めた。

『これにて思ひ残りも御座らぬ。今宵かぎりの莊の雨、夜すがら語り明しませうに』

十郎もこれに同じて、灯を消して臥床に這入ると寝もやらず狩場の首尾なぞ牒し合せた。

『狩へ召連る、供の下僕が準備ども奈何御座りませうか』

『鬼王丸と丹三郎、外に三名確と申附け置いた』

『弓絃、矢なんどの儀は』

『それも落なう取揃へある』

盡きぬ話に夜が白むと、田圃隔てた在家の鶏が長閑に朝を告げた。

『お、夜も盡きたけぢや』

『この儘に起き申さうわ』

兄弟がいぶせき眉を井筒に洗ふ傍に連翹の花は黄に咲いて居た。

『首途には嬉しい日和ぢや』

互に髪を梳きなぞして、きり、と元結の新らしきを強く結んだ。

■首途の巻

母所前とても同じ心。何とやらむ心の隈に残りたる前宵の對面を物足らす思ひながら、春の眼ざめの現なく鳥の聲を聞いて間もなく、鏡立して梳つる朝の装束とつかはと急ぐ處へ、五郎が供と定まれる鬼王丸が罷り出で兄弟の口上を申し傳へた。

「御兩所には只今御出立なされました。朝夙くと申し、且は御名残も盡きねばと下僕へまで御下命御座りました」  
「最早出で立たれたとな。表門へは氣振もないに」

「如何なる御思召あつての儀か、厩の脊なる破垣よりお馬に召されて御座りまする」

「それは又何たることか、遠慮ともあれ、程に過ぐる。……申す事のあれば、立ち戻るやう急いで傳へて呉りやれ」

昨日までは、顔も見まじ聲も聞くまじと情なくせし母御前が、今朝は荐りに名残を惜む。その心根を察して讃岐局も忠實々々しく勵まし慰めた。

「喃、讃岐、聞きやつたか。……晴れの狩へ乗するにも表門より駒も打たせず、垣の破れから出立とは不慙なもの、……誰あらう伊豆の河津の殿原ともあるべき身に、慙る心支ひをさする事胸も張裂くばかりぢや」

「お尤に御座りまする。幼ない頃より添乳參らせた妾までが、在る甲斐もなう覺えまする」

「それもこれも宿世の縁ぢや。是非もない。讀岐、酒器の用意を頼むぞや」  
「お名残の盃で御座りまするか」

「エ、占の悪い。兄の祐成どの、又男となつた時致どのに首途の酒を祝ふのぢや」

「ほんにそれに心が附きませなんだ」

讀岐局はいそ／＼と次へ退つた。

十郎と五郎とが殊更に垣の破れより出立したのは深い考があつたのである。再び生きて戻るまじき死出の首途に表門を潜るのは曾我の館の不祥事、父母兄弟の行く末の爲に態と厩の裏陰から鞍に上つたのである。兄弟は半丁餘り駒を打たせたが、顧みらるゝ館の邊に、菫蒲公英すがれゆく夢とり／＼の思ひが残つて、我にもあらで手綱搔ひ繰る拳さへ力なかつた。折柄鬼王丸は宙を飛んで

驅けつけた。

「母御前の召させます。申す事のあるとの御沙汰御座りました」

兄弟は手綱を控へて顔を見合せた。

「戻らいでは」

「今一度お名残惜みたう御座る」

くるりと駒を立て直すと、足搔を早めて再び懐かしの館に戻つて母の前へ出た。

二

母は酒器の用意を整へて靜かに兄弟を待つて居た。

「兄弟芽出度う打揃うての首途、心ばかりの祝ひの御酒、祝うて去にやれ」

十郎も五郎も、忝なしと押直つて三度づ、雫もあまらず飲み干した。

『今、ひとつ重ねられ』  
これを限りと思へば、咽喉も通らぬ悲しさを凝と堪へ、眼をふたいで重ねて干す。

『扱もく御芳志、腸に滲めて忝なう御座りました。この上の御懇には母上御手づからの御酌願ひたう御座りまする』

『時致もお流れ頂きたう希ひまする』

朝晴れの機嫌よき母は、ホ、と打笑みながら瓶子とつてなみくくと酌をとり更に新らしき盃を取上げて

『讃岐、注いで給も』

と云ふのを引とつた兄弟が

『その御酌、われ等にこそ仰せつけて下さりませ』

左右から打震ふ手に酌をした。元より深く嗜まぬ母の大盃を干すべうもなく、僅かに唇を濡らすを待つて、十郎が中央を干し五郎が傾けてその盃を懐紙に拭ふて懐中した。

『この御盃、母上とも侍つき参らせて明暮の憂も晴しまする』

母は包み切れぬ嬉しけな面持で、別れともなう兄弟の殿振りを眺め入つて居た。

『狩に行かば多くの殿原にも出逢はうなれど、鎌倉殿の御許しもないお身達、必らず僅かな功名を思ふて人目に立つやうな振舞しやるな。世にかくれ棲む業くれに、弓勢比べうと思ふまいぞ。只血族の人々にも逢は、慎ましう在して假初にも物争ひなぞ仕て給るな。……殊に時致殿とは幼なきからの語り草もさ』

わに残つてぢや。一日も早う戻つて御座れ』

焼野の雉子何吳と胸いたむる母御前が膝に置いたる扇に目をつけた五郎は、  
そいろ心に所望した。

『母上、時致が持古したる扇餘りに態悪しく候へば、お取替へ下さりませ』

『お、何よりも易い事ぢや』

手づから取つて時致に與へた。

これも狩へ罷る殿原にやあらむ。館の前を過ぐるかして、耳馴れぬ駒の嘶き  
が高く聞えた。五郎は屹となつて兄を顧みた。

『遅れぬうち、出で立ち申さう』

十郎も肯いて起上つた。

三

酒の酔か。——十郎祐成は妻戸の蔭を過ぎんとして、よろ／＼とよろめき倒  
れた。

『何とせられた。……十郎殿、折角の首途に躓つくとは心が、りな。強ちに今  
日と限らぬ、明日にも延べて出立ちやれ』

母は氣弱く引とめようとした。十郎も決し兼る風情であつたが、早くもそれ  
と心づいた剛氣な五郎は殊更に笑ひながら

『心ゆかしの酒の所爲でがな御座らうに、心弱き事仰せられな。いざ、罷らう』  
と先に立つて館を出た。兄弟は身輕う駒に跨がつて表門を出た。供の衆は鬼  
王丸丹三郎の外若者三人、霞こめ行く街道を顧み勝に打たするのを、母御前は

端近う送り出て

「わが子ながら頼母しうもあでやかに見ゆる。讃岐、其許が乳房を貸した小さい嬰兒があやうに成りやつたぞ。欣んで給もく」

とほくくと打欣ぶ。——皐月の空に風吹き満ちて、野に紅かりし木瓜の花もいつしか小さう實となるほとり。兄弟は見えずなりゆく曾我の莊を顧みながら、村を過ぎ、野を打越えて大道へ出た。この時既に頼朝の狩の列は鎌倉を發して駿河國藍澤まで進んで居た。

「刻遅れては詮ない。足柄山を打越えて馳せ参ぜう」

十郎は一圖に道を急がうとしたが、五郎は箱根路をと申し出た。

「審かしい事を云はるゝ。何しに態々道の遠きを箱根へとは志さすぞ」

「されば。打絶えて見参せぬ箱根の御坊へ舊恩を謝し、併せて亡き後の冥福祈

り置かう爲に」

「それは至極の思ひ立ちぞ。然らば箱根路より参らう」

若葉湧き立つ明き陽のかけを、駒を迅めて箱根の湯本に着いた。ほのくと立つや湯煙、塵を淨めの寛ろぎに欄干暗き湯女の戀もなく、矢立の杉の下過ぐるとて兄弟は吉例の一箭づ、射かけて武運長久を祈り、やがて湯坂峠へ駒をすすめた。

「雲ひとつなき日和の嬉しさ。……時致殿お見やれ。彼處は曾我、あれぞ大磯……あれく、何やら立のほる里の煙の見ゆるわ、大方曾我の村人のすさびであらう」

十郎は駒を立て、餘念もなう彼方此方に心を配る。五郎は何と思つてか黙々として一言もなく、眉さへ忌はしげに寄せて居る。



四

空飛ぶ禽は梢を戀ひ、峰傳ふ鹿は深山に夢の落葉を敷く。ましてや有情の間として、生別の悲しみを斷つの愁は洵に道理千萬な事である。

五郎とてもそれを知らぬではない。否人一倍苦勞した彼の胸中には、兄にも増してこの念が深うあつたが、常から情に脆き兄がまざくと涙さへ浮べて駒立つるを見ては、我も共に泣くべき場合でない。心を鬼にしても勵まさればと思つたので、わざと不興けに眉根を寄せて素氣なうも遇らうた。

『兄上……先づ涙を拭はせられ。後の世までも、曾我兄弟は古郷戀しさの未練の涙に足溢つたと沙汰さる、事心外で御座りませぬか。……曾我には母上の在す又大磯には虎の在れど、それにも増して狩屋の陣には我等大切の仇在る事をお

忘れなされますな。われ等とて一圖に涙を女々しとは存せねど、今は斯くて暇とるべき場合に御座らねば……』

供人や聞く、と憚りながら五郎は氣強う兄を諫めた。十郎も快く肯いて峠を急ぎ馳て箱根の権現堂の神前に詣で、稍々暫らく祈禱をこめた。それより別當の坊へ立越して別當行實に對面を申入れると

『何、曾我の殿原の見えられたとか、御案内申さずば』

いそくと自ら出で迎ふる師の坊の姿。僅か見ぬ間に眉更けし慈悲の眼は、昔の儘に柔らかう輝いて居た。

『先づ此方へ入らせ。……供人にも茶なぞ召されて……』

わが子の戻りども迎へるやうに、雑掌ともに指圖する待遇振りの何よりも嬉しかつた。兄弟は手綱を供人に預けて、坊の奥なる一室に打通つた。

「扱もく、久しう候ぞや箱王殿、前年山を降らせられてより打絶えて逢はぬ昔の稚兒姿に比べて、天晴殿振りとならせたな。この度の狩の首途、母御前にもお名残を惜ませられてか」

「海山の御恩。…母にも御赦免あらせて、このやうに小袖まで賜りました」  
「それは重疊。…暫しが程に見知れる衆も散りくゝになつたなれど、和殿が明暮てんがうした庭木や石はその儘にある。昔思へば物懐かしう覺さうに」  
時致は今昔の感に打たれて、無量の感慨に打たれて居た。人にかくれて木太刀を揮ふた向ふの峰、力試しの石を轉ばした彼方の坂、憎い仇の祐經に逢つたも此處と思ひ出るまゝに、臉にうつる佛の捨てがたきものがあつた。

五

「里に下らせられて後、工藤殿に對面されたか喃」

心ありけに問ひかくる別當の前に、兄弟は眼を見合せて

「ふつと逢ひませぬ」

と答へた。別當は荐りに背づきながら襟搔き合せた。

「それは、本意ない事で御座つたな。然りながらこの度は是非に御對面の折もあらうに。…よい土産ども待ちまするぢや」

「よい土産とは」

「ハ、ハ。お心を用ゐられな。桑門の曇らぬ眼に宜う殿原の存意は映りある。

…御父の仇討たう身の後世の供養をお頼ませの御入來でがなあらうに」

「御心添、膽に沁めて忘れませぬ。斯くある上は何をか包み申さう。…思ひきはめて立出づるこの世の名残、且は亡き後のお手向け専念にお縋り申しませぬ」

「實に然も在さう。……待たせられ。錢に進ずるもの御座る」  
別當は寶藏から二口の太刀を取出して来て、先づ一口を十郎祐成の前に置いた。

「この黒鞘巻の小刀こそ、その昔源家の九郎御曹子が木曾追討の祈願をこめられし業物、お身の守りとなさせられ。又五郎殿には」  
と兵庫鎖の太刀を取らせ

「これも同じ由縁あるもの。……夢にも我等が参らせしとは洩し給ふな」

と申し添えた。——重ねくの厚意に兄弟は只嬉しさの額下ぐるばかりであった。更に別當は明王の尊像を持佛堂に逆さにかけて

「兄弟が本懐を遂ぐるまで加護あらせ給へ。首尾よう本望叶はせ給はゞ直ちに

お起し参らすべし」

と珠數押揉んで祈禱を凝らした。

初夏の日は咽せるやうな若葉の香を透けて、冷えたる茶に山の晝の静けさを思はせる。別當は別れの酒をすゝめて別れを惜んだ。

「これにて思ひ残す事とてない。後世にこそお目にかゝり申さうに」

懇ろに別れを告げて兄弟は別當の坊を出た。行實はとほくと送り出て

「おさらば！。宜きお便りを待ち申しまするぞ」

と伸上りく、兄弟の影の見えずなるまで淋しき門に立ち盡した。

六

野七里、山七里打越えて伊豆の國府なる莊をも過ぎ、三島明神の神前に笠掛

七番づゝを射て眞幕に藍澤に向つた。——頃はしも皐月中洗の五日の空。

不斷の雪の陽の皓き三國一の富士の御山は、淺黄染めなす空廣う聳えて、夏雲輕う影そよぐ裾野の風に、緑を浸す草の穂が目路のかぎりに打靡いて居る。

「大將軍は浮島が原へ進ませられた。小林の里のあたりに勢子の喊聲も聞ゆるけぢや」

里人の語るが儘に、兄弟は急げとばかり鞍を煽つて乗つけると、街道の向ふから嚴めしい人馬が近づいて來た。

「鎌倉殿と覺ゆるぞ」

「遣り過ぐさうわ」

駒を降りて路傍に屈んで控へて居る間に、逸物揃ひの數百騎は輕き埃を蹄に立てつゝ、彼方へ行き過ぎた。

その行列のなかに、頼朝の直ぐ脇に駒を打たせた工藤左衛門祐經は、ちらと兄弟の姿をみると、いぶせき事と眉を擧めた。頼朝も何の氣なしに路傍の若人を見て過ぎた。

「祐經。見知りのものか」

頼朝は深き心もなく恚う訊ねた。

「上、彼れこそ伊東入道が孫どもに御座りまする」

「扱は。……河津が忘れ遺身の兄弟とか」

何とやら濟まぬけの面持でその夜の陣所に這入つたが、伊東入道の怖い眼に睨まれた昔の事を思ひ浮べて、兄弟が世を忍ぶ心根をさまざまに推察した。

「いかさま、工藤を覘ふでがなあらう。入道の縁に繋がる冠者ばら、予とても油断はならぬ」

祐經は殊更である。巢を發見されし梢の禽のそれにも増して、今宵ひと夜が案ぜらる、抜目のない彼は暮夜俄かに陣所をかへて頼朝の御座所に近き警護の垣のうちに潜み、明くるを待つて御前へ出てほつと安堵の胸を撫でた。

その翌日は裾野を西へ井出の館、此處を本營と定めていよく盛んなる狩が初まらうとした。その矢先にも頼朝は小林の里で見た兄弟の事が氣にかつて心が浮かぬ。剛腹天下に號令する彼も亦伊豆の流離の昔の夢を忘れ兼ねて、假初ならず兄弟を重く見たのである。

『景季參れ、梶原はなきか』

召に應じて源太左衛門景季は頼朝の前へ罷り出た。

### ■狩場の巻

一

『いかに景季、其方も知りつらう會我の冠者ばら、この度の狩に紛れて供しつるは、必定祐經を怨まう所存と覺えた。この儘に捨て置くもいかい、思ふ仔細あるで其方を呼うだちや』

頼朝は聲を低めて何やら梶原に申し含めた。景季は畏まつて退出すると直ちに眼を光らせて朝かけの陣所々々を繞り歩いたが、遙か末なる野ぐれの樹かけに、名もなき端武者と立交つて今しも駒に鞍置かする兄弟を發見すると、然りけなき態で立寄つた。

「會我の殿原、久しう御座る喃。ちと折入つての御内意承はつて推參致した」  
 「これはく梶原殿。お恥かしい姿をお目にかけまする。鎌倉殿お情にかくれて御狩の光景を見よう爲にお供致しました。御内意とはお咎ども御座りまするか」

十郎は懇ろに腰をかやめて、憂はしげに景季を見上げた。

「何の、そのやうなお咎では御座らぬよ。……欣ばせられ、大將軍御恩命ぢやに」

「すりや、鎌倉殿にはわれ等斯く在るをお知らせ御座りまするか」

「小林の里過ぐる砌御覽じたけぢやなれど、心づかひはふつと御無用。將軍には却つて貴殿等明暮を不慙とも思されて、景季にまで御内意を傳へさせられたぢや」

「忝ない事で御座る。して御内意とは奈何やうの儀でがな」

「御館にはやんごとなき御物具ども數多残しあれば、洩なう留守の心を配るやうにとの御意」

「然らば、われ等に御留守居の役申附けらる、で御座りまするか」

「如何にも。首尾宜うこの役目果されい。御狩の後の引出として面晴れの御沙汰も在さう。不肖ながら景季よりもお取持致さうわ」

「身にあまる嬉しき御説。人がましう思召さるればこそ鎌倉殿の御心にもとめさせられつらう」

「御受召さるか」

「謹んで御内意に副ひまする」

「それでこそ貴殿等繁昌の基が開けたと申すものぢや。確と御留守を承はら

れい』

仕てやつたりと景季の立去つた後見送つて、五郎はぬつと樹蔭から現はれた  
『兄上、本心でか』

二

『いしくも圖らうと企み居つたわ。喃時致殿、數ある武臣を差措いて、われ等に留守を預けうとは受取れぬ儀ぢや。一定我等を狩場より退かせう口實、やがて遁さぬ網の獲物とせうと判ぜらる、』

十郎祐成は事可笑しけにせ、ら笑つた。一徹な五郎は

『それ存ぜられながら、確と言葉を番はれたは何ゆゑ御座りまする』

『眞實のない梶原輩に、何しに本心告げやうか』

『反古か』

『乗せたぢや』

腹を揺つて哄笑した兄弟の腫は、小氣味よけに輝いた。——然りながら、頼朝の目にもとまり、良にかけよう企みのある程では、當の仇たる祐經にも油断はあるまい。怒じひにためらうて仇を逸しては千日の萱を焼く憾みに終らねばならぬ。

『咎められなばそれ迄よ。先に廻つて待伏せう』

兄弟は脇道から駒を急がせて狩場に向つた。——芒をわたる風は青く、身丈の伸びたる夏草を踏みしだきつ、驅せめぐる勢子の喊聲は、波打つ如く遠近に聞えて来る。——芙蓉の雪空に涼しく、人馬の渦に獲物を包んで風を起す。猪、鹿、兎、雉子、山鳥、箭鳴りに應じて射止むるなかに、兄弟は眼を光らせて若

しやと仇の姿を求めた。

五郎は萌黄の裏つきたる竹笠を戴き白籐の弓を握つてどつと駒を丘に乗り上げ、白唐綾の小袖に重ねし楓の落葉紅う染めたる直垂を風に煽らせて屹と見る十郎も亦生絹の裏張りたる竹笠をいたゞき、連銭つけたる浅黄の小袖に、秋野の蝶を圓う染めたる直垂凜乎として丘の下なる草のなかに二所藤の弓を握る。

『それ鹿ぞ』

五郎が眼路に入り来る三頭の大鹿を追うて、柏摺りたる水干の袖を絞り、栗毛の駒を飛ばせて近づく一騎。

『祐經ぞ、遁さぬ』

丘から逆と駒を乗降したが、生憎や越ゆるに難き水の瀬に隔てられて進み兼ねる。——この間に鹿も祐經も風の如くに驅け抜けようとする。——五郎は突嗟

に思案して

『兄上、鹿ぢや、遁されな』

弓を差のべて指さす方に眼をつけた十郎は

『さてこそ、怨敵！』

と鞍を叩いて、俄かに駒を立直さうとした。

三

嬉しや尋ぬる敵を見かけて、怨みの一箭引しほる果報と、十郎は敵を弓手に射て落すべく俄かに駒を立直す途端に、無念や蹄を木の根にかけて駒諸共に慥と倒れた。この間に祐經は遠く彼方へ驅せ去つて了つた。五郎の手に掻き起きた十郎は、五體の痛みも打忘れて無念の齒がみをした。



『いかなれば斯くも武運拙なきわれ等ぞ』

『然もあれ、狩も今日とは限り申さぬで、お心を落されますな』

五郎は兎角に云ひ慰さめつ、氣を取直して駒を走せたが、頼朝からの内意とあつて晴れて此處に在られぬ身は、場末々々と面を匿して若しやくと胸を躍らす。――箭は番へても、猪鹿の功名を希はず、薄れ行く日の暮る、を追ふて西に東に竹笠は傾けたが、遂にその日もその翌日も祐經の姿は見かけなかつた斯くして定めの日も盡きなば、空しく千載一遇の好機を逸して了はねばならぬ

『今日こそ』

『今宵こそ』

心焦立つ兄弟の眼は血走つて、無駄に捨てたる箭數さへ今は残り少なくなつた。

『狩も明日を限りと聞いた。所詮は一日二夜のうちに本望遂けずば叶はぬ』

兄弟の心のうちには又一つの暗い影が印された。それは頼朝の思惑である。

梶原景季に内意を含めて兄弟を狩場から去らさうとしたのも、決して底からの好意ではない。狩が果てたら處分して枕の夢を安うする考に違ひない。殊にはその内意に背き、梶原との口約を反古にして狩場を往來せる事は、紛れもない咎めの口實となる。胸の狭い意地の悪い頼朝は必らずそれを楯にとつて兄弟を捕らせるに極つて居る。何れにしても兄弟の運命は『死』の一字によつて解決される。『死』は怖れぬとした處でいま祐經を討ち洩らしたら再び思ひ立つ事はならぬ。

『鎌倉殿の手に捕られて無慘々々と首討たる、程なりや、叶はぬ迄も狩屋に斬入つて屍を曝さう』

絶體絶命、死なねばならぬ身を惜むも、一圖に仇を討ちたいばかり。兄弟が腕を扼して星奔するうちに、心なや前代未聞の裾野の狩も終りを告げた。

『明日は大將軍當所御出發』

陣屋々々へ觸れ歩く傳令を傳へ聞いた兄弟の胸は波打つ如くであつた。

四

今宵かぎりの命——然う思ふと皐月の空の心なけに暮れてゆくさへ惜まれて夕雲包む富士が嶽も心佗しう打仰がれる。——十郎は只ひとり供をも連れず立出で、陣屋の模様を見ようとした。

『暮れなば共に斬込まうぞ。……用意しやれ。暫らくの間瀬踏みして來よ。』

態と装束打寛けて宵闇を踏んでゆくと、裾野の風のそよよと肌輕輕く、夕に浸る草木の色のおほつかなきに浮き出でた屋形々々の幔幕の鮮かさ。假初に茸きけむ庇の波を打たせて、其處にも彼處にも宵の灯が夥しく連ねられた。

『扱もく殿原の樂しげに寛いだるさまよ。祐經が陣所はいづれか』

そいろ心地に辿りゆく前にも後にも、狩の獲物を着に汲む酒宴のさゝめきに艶めく女の聲さへ聞える。近きほとりの遊女ども召連れてか、奥底もなく興がるなかに、わが身は可愛しき虎御前を大磯にとゞめ置いて、思ひ詰めたる一念に逍遙ひ歩く。甲斐なき佗しさに囚はれながら、半刻あまり迷ひ歩いた末に、ふと庵に木瓜の幕打めぐらせる屋形の前へ出た。

『これぞ紛れもなき祐經が屋形ぞ。晴がましうさゝめくは酒宴か』

密と立寄つて幕のかけから屋形のうちを覗いて居ると、横手から現はれた一

名の端武者が

「怪しい奴。動くな」

とむんづと組んだ。折悪し、と思つた十郎は、騒がず片手に襟を抑へて

「推参な。去ね」

とばかりに投出して足を早めて立去らうとする後から

「お待召さ」

と聲かけて近づいたのは、祐経が郎黨平井紀三と呼ぶ士であつた。

「失策したり。見あらはされたか」

近寄らば眞二つと、太刀の束に手をかけて左足を後に身構へた。

「何人ぢや」

「拙者は工藤左衛門殿が郎黨、平井紀三で御座る」

「その紀三とやらが、何故あつて呼とめたぞ」

「主人御意を承はつて」

「何と……」

「この儘お通らせはちとお怒み、是非にお立寄らせ下さるようとの儀に御座り  
まする」

「祐経殿、對面せうとの仰せか」

十郎は思案した。立寄らうか、この儘去なうか。

五

敵を怖れぬ十郎も、この束の間は胸が騒いだ。密かに様子を見て置かう爲に  
忍んで來たのを見出されたのみか、呼びかけられて酒進ぜうとの下ごいは。

絶えて面見ぬ祐経への見参は飛立つばかり嬉しいけれど、先から盃呉れうとある程では油断はあるまい。事によつたら押包んで討たう企みがあらうも知れぬ。その時こそは、腕かぎり斬り靡けて一太刀なりと怨むは易いが、若し然うあつたら五郎は何とする。死ぬも活くるも諸共の誓ひに洩れて、この十郎を甲斐なきものと怨むであらう。

『はて、何とせば宜からうぞ』

と言葉もなく停んで居ると、又もや幔幕靜かに掲げて立現はれた幼なき公達眼も涼しげに笑みながら

『いかに曾我十郎殿、犬房丸お迎へに罷り出ました。父上にも待たせらるゝ。いざ、お通り下さりませう』  
と懇ろに挨拶した。

『これはく。御念の入つたる事、犬房丸殿には初めて御意得る。拙者十郎祐成で御座る』

『兼て父上よりのお話にも承はりまする。御見知り置かれませ』

十郎も今は遁れ難き羽目となつた。愁じひに遠慮して肚を見られては却つて妨げ、寧ろこの際羽袖を縮めて、仇の心を油断さするが得策と思案して誘はるる儘に屋形のうちへ歩みを運んだ。

今、鎌倉に時めける工藤祐経の屋形の美事さ。假寝の夢の慰さめに千金の伽羅さへ惜まぬ贅を盡して、右に黄瀬川の龜鶴、左に手越の少將を引つけ、お前に控へし備前吉備津の宮の祠堂大藤内に盃呉れつ、悠然と燭に座して居た。

『十郎殿と申せば、大磯ほとりに名の高い虎御前の思はれ人で御座りまする喃』  
美しく化粧した手越の少將はにつこりとして、鶴龜を顧みた。

「ほんに、果報に一度は盃さ、うと思ふて居りました。噂に高い美しい殿に逢はれうとは、飛んだ嬉しい事で御座りまする」

浅き酔に憚りもなくさやめき浮かれると、祐経は苦々しげに

「控えい。彼のやうな宿なし鴉、こゝら邊へ迷ふて來たも、大方酒の香を嗅きつけて失せたである。いま面出したら剩りの雫ども振舞ふてやれ」

と嘲り罵つた。

六

深き願ひの筋あつて、わざと狩場に祐経を訪ねて來たほどの大藤内は、早くも主人が不興な氣振を見てとると、取なし顔にいや、り出で機嫌を取結ばんとする。

「曾我の殿原と仰せあるは、御一門河津殿の和子達で御座りましたな。……世に時めく殿とは打變つての狭き世すがに、お流れ戴きたさの垣間見と御座りませうわ」

「客人云はる、通りぢやよ、打怕たれた小袖の色に、遊君づれの心を惹く生暖い奴ども、大方狩に駒乗潰いて替鞍の無心にでもうせおつたぢやろ」

「笑止な沙汰ぢや」

舌動くまゝの惡まれ口に、少將も龜鶴も片腹痛い風情であつた。——もとより黄白に買はれし身の眞實を運ばう筋もなく、却つて久しい噂に聞く曾我の殿原を迎ふる心の欣びを腫に包んで居た。

「曾我十郎殿、これへ參られまする」

案内の聲に伴れて静々と歩み入つた祐成の物腰は、眞に繪に畫いたやうに美

しかつた。

『これは宜うこそ、先づぐ、此方へお通りやれ』

今のいま迄、嘯みつくやうに悪罵して居た祐經は、別人のやうに溢る、ばかりの笑を溢えて懐かしげに招き招じた。掌かへす心の表裏、武士にあるまじきこの懸引こそ彼が榮達の身上であつた。

十郎は靜かに會釋して席についた。

『兼て懐かしう存じあつた十郎殿、思はぬ旅の對面は何よりも嬉しう御座るよ。扱て早や何から物語らうか、承はりたき事、申述べたき事、さわに御座るぢやに。……恚う對座のして思ひ出さる、は河津殿面影、御父子とはあれ瓜ふたつぢや』

世辭たらくに盃をさす祐經の輕薄な笑顔を辱しめるやうに横目に見た少將

は、うつ、なげに十郎の殿振りに見惚れて居たが、祐經がさす盃に我にかへつて嬉しげに瓶子を取上げた。

『お酌参りまする』

十郎は盃を押戴いて

『御挨拶は此方こそ。……一門の長者、とうに御機嫌伺ふべきで御座りましたなれど、知らる、通り、定まる時もちまませぬ身の空、御無禮に打過ぎ申した』と煮え立つ胸を凝と堪へて、少將が酌する儘になみくと大盃を干して祐經に返盃した。

『十郎殿、その盃に添へての肴が所望したい』

『これは難儀、はて肴と申して』

『本心の承はりたい』

『エツ……本心とは』

七

静かな燭は風に揺れた。打笑ましげに輝いて居た一座の腫には、不安の雲がか、つた。祐経は用意深い眼に凝と十郎の顔色を讀まうとする。

『異なる事の御所望、十郎迷惑致す。本心と申して殊更に陳ずる筋ふつと御座りませぬ』

『隠されな十郎殿。お身達兄弟、拙者を父の仇と覘ふて、あらうがな』

『何と云はる、』

十郎も屹となつたが、有繫に思慮の深いだけに騒立つ胸を抑へて何氣なく装ひ眩まさうとした。

『この度の狩にまぎれ、鎌倉殿の内意に反いて迄、こゝろ邊に立寄らるゝ所存、無理からぬ事に察し申す、拙者とても御身とは同族、一つの枝の末に咲く花の姿こそ盛衰はあらうも、咲くも散るも同じ土ぢや。この祐経の首授くるも念ない業ぢやが……』

と言葉を低めて悄然とした。

『……只、古い昔のこと、筋誤まれる怨みによつて無慘と討たるゝも遺憾、一度はお身達にも逢ふてゆゑりと語らうて後、尙怨みの解けぬとあれば討つ討たるゝも武門の慣ひと深く思ひきはめてあつたのぢや。その念が届いて圖らざる對面、この上もなく欣ばしう覺え申すぢや』

情らしい慈悲を加へて、身を遁れうとする腹黒き汝——十郎は態と沁々と差控へて、慎ましう應答した。

勢

『思ひも寄らる事承はりまする。父の仇と覘ふなぞとは露更覺えの御座らぬ儀……誠はわれ等世の出づる望みの絲も絶えませんでしたで、愁じひに執着の夢嘆かうより、落飾して佛門に餘生を托さうと存じきはめたに就きまして、男の名残武門武士たる身の思ひ出に、他所ながらこの度の狩のお供致しました』

『それはく。そのやうな思し立ちより狩野の供にも加はられてか。さりとては心の弱い。……お身達の心も晴れたとあらば、祐經が如何やうにも膽煎つて世に出し申さうわ。……やれく初めて重荷を卸いたやうぢや。われ等は又一圖に仇と覘はる、とばかり案じ居つた』

『それは餘りに御苦勞の過ぎましたこと。假初にも、われ等瘦腕に貴殿を討たうなぞと及びもつかぬ。御安堵召されませ』

八

祐經は然もありなむとばかり肯つきながら、叢雲の晴れゆくやうな心易さに胸を撫でつ、盃をあけた。

『河津殿が奥野の狩の歸るさに討たれし砌、祐經は都にあつて何事も知り申さぬぢやよ。……その筋に違ふたる仇敵の名を受けたは、伊東入道殿以來所領の争ひあつてからの事、世上祐經が私慾とそしるものあるけぢやが、強い迷惑。いとくわれ等が所領たるべきを入道殿濫りにお身達が父河津殿に取らせて祐經を除けものにせられたぢや。依つて鎌倉殿にも訴訟した。面白からぬ隔ても出來た。それ聽てわれ等覺えぬ怨を着る基となつた。尙入道殿、昔鎌倉殿に情なうせられた氣拙い困縁もあつて、河津殿亡き後の酷めも在したなれど、斯く



お互ひの心も解け祐經をさへ頼ませらるゝと仰せあれば、枯れたる枝にも花が咲かう。……お身達行く末は恙なき榮を見ようわ」

これでもか／＼と思を冠せかけようとする。何の辯解、今となつてその舌先にころりと参る程の白痴と思ふてか。十郎は却つて肚のなかに可笑しく感じた然し祐經は先刻からの酔に加へて上機嫌である。

『これ犬房……十郎殿に酌とらぬか、お盃を戴かぬか。……曾我殿、一門稀る見る武道の達者、將來を引立て、貫はにやならぬで』

父が計略の甘言とは知らぬ犬房。云はる、儘に瓶子をとつてする／＼と進み出た。

『十郎殿、お酌参りまする』

『これは／＼、忝なう戴き申す』

他意なげに、懐かしさうに、酌をとる少年の姿をみると、十郎は急に例へなき淋しさに囚はれた。——今宵われ等が祐經を討取つたら、明日はこの少年がわれ等を親の仇と怨むであらう。不惑のものよ。——と思ふにつけても、唇ふれて呑む盃の淺き縁が打嘆かれた。十郎はやをら座を起たうとした。

『先づ悠りと御座らせ、古めかしい理づめの愚痴に興も盡きた。……少將、鶴龜、客人に着せぬか』

『畏りました』

背き合ふてすらりと起つたふた木の花、目さむるばかり紫の袖をかざして、舞扇しなやかにひらくと手振を見せた。やんや／＼一座は舊の賑はひに立戻つた。

九

舞ひては唄ひ、唄ひては舞ふ。

そこはかたなく暮れはてたる燭の前に、寄りては離れ、離れては合ふ蝶の羽袖、少將も、龜鶴も、額白の美男十郎の見る目の前に、心ゆかしの限りを盡して芽出度う一曲を舞ひ納めた。

「扱てはや美事な事、殿、褒美には何遣はされまする喃」

大藤内は仕たり顔にいや、り出ると、手越の少將はほ、と笑つて十郎の顔を見た。十郎も心なく軽く笑つた。

「何取らせう」

祐経は嫉ましけに美しい仇の末を見た。

「御褒美には、ちと好みが御座りまする」

斜めに肩を滑らせた舞袖が、夢のやうに艶めいた。

「ほ、う。好みとは……何なと取らする。望みやれ」

「お客人のお盃が戴きたう御座りまする」

「十郎殿のか」

「名に高い殿原の手づから、戀の甘酒戴くが遊君の譽れ、お取持ち下さりませ」

酒が云はする好き心を何と聞いてか、十郎は他事のやうに笑つて居る。

「妾はお客人の口づから、舞の手振のいとささと嬉しいお言葉を聞きたう御座りまする」

「其方もか……」

「あい。せめてもの御狩の土産に」

祐経は苦々しげにせ、ら笑つた。大藤内に眼で知らせた。猪口才な祠官は呑  
込顔に舌なめづりして先づ少將に膝を向けた。

「其方の好み、お客人も満足在さう。ぢやが聞きやれ。……お氣の毒な出世前  
の殿原、滅多に其方や龜鶴輩の情にひかれて、大切のく行く末を暗うはなさら  
ぬ。戀の、譽れのと、先づお客人が歴きと受領安堵してから談合しやれさ」  
「ホ、ホ、。そのやうな事仰しやると遊君達に笑はれますぞ」

「そりや、何故に」

「端たないわれ等の戀にも、意地が御座ります。仇忌らしい大名衆に瞑る眼  
も、好もしい殿原となりや逢ふ夜の星と冴えます。黄金も命も要りませぬ。  
只一筋に本望遂げねば措きませぬ。これが戀の眞實で御座んす。喃、左様では

御座りませぬか」

すり寄るやうに誘はれて、十郎は然も嬉しげに

「その心、嬉しう聞いた」

と盃を少將にさした。黄金も命もいらぬとは、今のわが身に宜き辻占。――  
本望成就の印ぞと喜びながら、白けかゝりし座を起つて別れを告げた。

十

五郎や待たん、長居は無用と程よく切上げて屋形を出た十郎は、心に深く思  
ふ處あつて小柴の垣の蔭にかくれた。

「やれく。氣つまりな客人がお去にやれて肩の凝がほぐれたやうぢや」  
大藤内の阿ねる聲が手に取るやうに聞えて来る。

「折角の興を薄めて了ふたわ。こりや其方達も品造らずと盃を廻さぬか」

少將にや、龜鶴にや、思ひありけに唄ひ出る唄のひと節。——十郎は何とやら淋しい心地で、凝と動かす忍んで居た。

「殿全盛を見るにつけても、御一門に相應はしからぬ彼の人の見すほらしき。頼りなき身は何處やらに窶れが見ゆるけで御座りました喃」

「應さ、彼奴等が祖父の世にある頃はわれ等は捨てもの、鎌倉殿でさへが狗のやうに追廻されたぢや。その怨が今の彼奴等に酬ふのぢやよ。面白の浮世のさま、誰が身の上にも小車は廻るさうなアハ、ハ、ハ、」

知らぬが佛。——その因果と云ひ、浮世と観じて今の榮華に耽つて居る祐經の身が、目前因果の小車に乗せられうとは。——草の穂に貫く露の命。——十郎はにやりと笑つた。

「初めて承はる。然れば鎌倉殿も、伊東入道とやらには深き無念の含まれて御座ります喃」

「うむ、すんと怨みがある。それも戦場の表裏とは事違うて、浦若い砌の色めいた沙汰ぢや」

「世のたとへにも、戀の怨みは親をも殺すと申しまするに。いかやうの儀で御座りましたか」

大藤内が膝を進めると、少將も龜鶴も左右から

「興ありけな昔がたり、何卒聞かせて下さりませ」

「それ程に聞きたくば語り聞かさうわ、先づ慙うぢや」

手にした盃を下に措いて祐經は勿體らしく扇を構へた。

鎌倉殿御父子が平氏の爲に京を逐はれ、笹龍膽の花散りぐくに伊豆の國へ流